
城と剣に天使様

道化者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

城と剣に天使様

【コード】

N8033G

【作者名】

道化者

【あらすじ】

今作は未熟者同盟で立ち上がった『壹葵様のイラストを元に小説を書いてみよ』（仮）に乗った物です。

1 筆目：執筆完了、新世界（前書き）

イラストが基礎となっているキャラの性格・容姿表現等は作者の感性に強く依存しておりますので、実際のそれと異なる可能性が。

1 筆目：執筆完了、新世界

青い空は広がっている。何処までも、何処までも、永遠と思えるまでに広大。

蒼穹は果てし無く、当て所なく、始まりもなく、終わりも無い。雲も何も浮き非ず、見渡す限りの青。在るのは空だけ、ただ青だけ。

さらさらと、筆が走る。

ガラスで出来た雅なペンが、何も無い虚空へと文字を刻む。

描かれる一文字に、乗るのは想い。

紡がれる一文字に、秘めるは願い。

綴られる一文字に、宿るは世界。

金の髪を靡かせて、空色の衣を振るわせて、その人は筆を振るう。軽やかな腕運で、時に激しく、時に優しく。宙を駆ける煌きが、次第に全てを染め上げる。

空へたゆたう文字の海、そこから滴る、夢の音。

「始まるね、始まるね。主さまが新しい物語を書き上げたよ」

今では空間全てを埋める途方も無い文字、文字、文字。それを見上げて、赤い衣の天使が目を輝かせる。

薔薇色の髪を左右で2つに結わう、それは少女。あどけなさの残る顔に、見えるは緋色の瞳。

金の首飾りを巻き、紫の肌着と、青のハーフパンツを身に付けて。その上から赤い衣を纏う者。背中からはカーディナル色の翼が生える。

期待と興奮に彩られた双眸を、静かに波打つ文章群へ注ぎ。彼女

は片手を天へ向け、満天の文字列を撫でようとした。

「今度は、どんなお話かしら」

同じ様に空を見詰める緑の衣を着た天使。彼女は微笑みながら息を吐く。

髪の色はアップルグリーン、揉み上げ部分のみが肩を越える程に長く伸び。髪に隠れた耳辺りから、緑の小さな翼を生やす女性の姿。首には金の首飾りを巻き、着込むはコバルトグリーンの薄手な口ブ。ゆったりとしたそれは、彼女の線を浮き彫りにする。穏やかな面上に刷かれた、たおやかな微笑と相まって、彼女を落ち着きある大人な女性と感じさせ。

澄んだ瞳に映り込む、浮かび漂う文字の道。それは彼女の吐息を受けて、波紋のように揺れ動いた。

2人の天使が見守る中で、金髪揺らすその人は手を止める。

最後の一字を書き終えて、指の上でペンを回した。それは、己が仕事の終了を告げる合図。

次の瞬間、宙空を満たす文字という文字全てが、一斉に黄金の輝きを放ち出す。一文字ずつが眩い光を周囲へ飛ばし、見遣る天使の目を閉じさせた。

咄嗟に額へ手を翳し、降り注ぐ金光を防ぐ乙女達。それに反して、直視に辛い黄金の斉射を、金髪のその人は笑みさえ浮かべて受け止める。実に楽しそうな、喜悦に満ちた快笑だった。

不思議な3者の様子に構わず、宙を埋める文字の変化は続く。激しい光をそのままに、文字達はまるで水に浸された墨が如く、静かに滲んで消え始めた。

溶けて、消えて、無に帰す文字。全てを照らす明光残し、次々失せる文字また文字。

天使達が目を開ける。揃って空をまた眺める。

彼女達の瞳の中で、文字の走っていた空が歪む。輝き湛えた虚空が撓み、渦巻くように動き出す。回る、廻る、まわる、マワル……文字が果て、宙が螺旋を作り上げ、その巡りは今や数えられぬ程。

「さあ、作品の鼓動を聞かせてくれ」

金の髪の毛の人が、空に向かって高らかに叫ぶ。

直後、渦の、歪みの、螺旋の中心が、音も無く弾けた。瞬きの間さえ超える脅威の猛速で、空は瞬時に黒へと変わる。渦の中心から広がった黒は全てを包み、2人の天使と金髪の人以外、何かも染めてしまった。後には何も残らない。ただ只管に黒。まっつき黒。

「わくわく。どきどき」

赤の天使が口を動かし、自らの胸中を言葉に変える。無音と化したその場には、彼女の声が大きく響いた。

「感じます。確かな響きを」

緑の天使が胸に手を当て、受け取る事実を小さく囁く。

鈴音に近しい可憐な声が、黒の世界へ染み渡った。

そして始まる新たな変化。

延々と広がる黒の中に、突如として亀裂が走る。最初は1本の線だがすぐに分化し、統一性のない無数の罅割れが生まれた。それは黒の出現と同じ程の速度で、空間の果てまで急速に拡がる。

金の髪の人が、不敵に笑いながら指を鳴らした。

小さな、けれど確かな存在感を示した音。同時に、黒が碎ける。

叩き割られたガラスのように、無数の破片を撒き散らし、全てを包んだ黒は粉々に散った。回転しながら舞い飛ぶ破片の数々。小さな欠片は宙空で色を消し、素早く透けて実体を失っていく。天使達や金髪の人へぶつかる事も無く、互いに擦れ合う事もなく。

崩れ去った黒の後、その背方から現れた景色は元の空。文字も、光も、存在しない、青空のみ。

但し、異なる所が1つだけ。天使達の見上げる先に、姿を現す巨大な城が。空の彼方の虚空の先に、彼女等一同頭上の果てに、驚くなかれと佇む王城。

数々の物語に記されてきた、ファンタジーの象徴とも言える白亜の大城。それは幾多の棟と聳^{そび}える列塔を高く伸ばし、雄々しく雄大なる威容を以って屹立していた。異常を謳うとするならば、空の真中に巨体を据えて鎮座するのと、逆さとなっている事か。

そう。その城は天に向かつて建つのではなく、その頂上点を本来とは真逆、下方へ向けて存在していた。城を見上げる天使達に、自らの頭頂を突き示し。

尤も、そこは空以外には何も存在していない場所。どちらが上で、どちらが下か、それは判然としていない。全ては天使達を基点とし、見た場合に過ぎないが。

「お城だね。おっきいね」

黒を割って現れた遙かなる偉状を指差して、赤の天使は楽しげに笑う。

彼女の心を表すように、背へと生える双翼が忙しなく羽^はためいた。

「でも、仄かな悲しみが流れてくる」

無邪気にはしゃぐ赤の天使の傍らで、緑の天使は目を閉じる。感じる思いを胸に受け、微かな切なさを声へと乗せた。

「物語。それは一時の夢。儚い幻。されど其処には、確かに息衝くモノがある。感じ取られようと、無視されようと、変わらず宿るモノがある。創作とは、担い手の魂を他者へ伝える思いの形。だからこそ、力だ」

金髪のその人は、天に浮かんだ逆さの巨城を仰ぎ見て、誰とはなしに言葉を投げる。

確信と決意に滾る真摯な声は、空へ届いて霧散した。

その最中、赤の天使と緑の天使は、共に背後を振り返る。彼女達の視線が先へ、何時現れたとも知れぬ卵が1つ。

「丹精込めて紡いだ物語、それはどんな物であれ、書き手の魂を反映した律動。命の片割れ。だからこそ、価値がある。そうは思わないか？」

金髪のその人は言いながら、天使達と同様に、唐突に出現していた卵を見遣る。

淡く、金色に光る卵。何も語らず何も返さず、ただただ静かに、薄い明滅を繰り返す。その内側で育まれる何かが、鼓動しているかのよう。

「俺は、書き続けるぞ。好きだからな。楽しいからな。誰に何を言われようと、俺は俺の書きたい事を書き続ける」

卵から視線を外し、再び上天の城を視界に置いて。金髪のその人は、手にしたペンを腕毎で高らかに掲げる。

天使達も彼の人を見た。屹然とした佇まいで胸を張り、確固とした信念で宣言する。そんな創造主へ、激励にも似た温かな視線を送り。

「さて」

不意に、金の髪の人が振り返る。

彼人の瞳に映り込む、赤と緑の姉妹天使。小首傾げる彼女達を捉えたまま、深い色合いの瞳が鈍く光った。

「折角だから、楽しんで来い」

彼の口が開閉した直後、2人の天使は光の球に変じてしまう。

片手に収まる程度の小さな球だ。それらは緩やかに浮かび上がると、次には燐光放って急上昇。風の疾さで逆さまの城へ飛んでいった。

「はわわわ〜!?!」

「あ、主さま、これって……」

天使達に抵抗する間はなく、ただ状況を受け入れる以外に術はない。

遠く彼方へ舞い上がる光球から、驚きと困惑の声は僅かに届く。けれど、それさえ半瞬後には聞こえなくなってしまう。

反論する機会も与えない。文字通り、有無を言わさぬ早業だった。

「後で感想を聞かせてくれよ〜」

遠く去り行く光球を見送りながら、金髪のその人は愉快げに手を振る。

ニヤリという擬音が聞こえてきそうな、そんな笑みを浮かべて。

彼の背後では、空の只中に浮いた卵が無音で脈打つ。控え目な光だけを、後に残し。

2 筆目：少女剣士、舞う

白き石壁に囲まれた、広大な空間がある。天井は極めて高く、左右の壁は互いに遠く、奥行きも非常に深い。

豪華な設えも、絢爛たる煌きも、贅を尽くした装飾も、見事感嘆たる意匠も、何も存在しない空間。ただ広く、四角いだけの簡素な世界。

その最奥には、一脚の椅子があった。侘しい空間に1つだけ、唯一と言える調度品。それは大理石をまるごと刳り抜いて作られた、硬質な限りの玉座である。厳格な威風を感じさせるでなく、霸王の威圧を幻視するでなく、ただ其処に在るだけの玉座。

何の面白味もない領域に据えられた、何の面白味もない玉座は、酷く似合いの置物だった。

本当に何も無い、冗談のような謁見の間。そこは生気の欠落した世界。だが対極に、死の臭いは満ち満ちている。原因を探るのは容易い。広間の床一面に転がる、黒き鎧の群が答えであった。

籠手と具足と鎧と兜、黒一色で纏められた全身鎧。盾と剣とで武装したそれらが、床の上に夥しい数散乱する。中身は無い。全てが空。着用者は何処にも居らず、小さな血痕さえ見られない。但し、全ての鎧には濃厚な死臭が染み付いていた。

空間を満たす死の気配は、何も倒れ散ばる鎧だけ発せられている訳ではない。その場の内奥、玉座の近辺に押し寄せ寄せる鎧達からも、同様に零れ出ていた。

漆黒の鎧達。全身を覆う完全武装のフルアーマー。黒の盾と黒の剣を携えて、異様な軍勢は動いている。倒れている鎧達と全く同じ形なのは、一目で知れた。

黒の大軍、その総数は数十に及ぶ。倒れている物も合わせると、百でも二百でも利かない。1つ残らず同じ形状、同じ色合い、同じ

武装、同じ死臭。そしてどれも同じ様に、人の気を一切備えず、幽鬼のような足取りで前進を繰り返す。

向かう先には簡素な玉座がある。美的も麗しさもない玉座。そして、その少し前に立ちほだかる1人の少女。

銀の髪を背中まで流した、小柄な少女だ。顔にはまだ幼さが残り、年の頃を15、6と思わせる。切れ長の目には毅然とした光が宿り、意志の強さを示していた。

整った容貌をしているが表情は硬い。小さな唇は固く引き結ばれ、強張った顔は蒼白に寄る。

彼女が着込むのも、また全身を覆う堅固な鎧。ただこちらは白を基調とした物。首から下を完全に包む鎧は、顔以外の肌を一切隠し、若い娘が身に付けるとしては、些か大仰にすぎる格好である。

鎧には随所へ傷が刻まれ、相当な使い込みを感じさせた。おろし立ての新品で無い事は、全面に満遍なく^{まんべん}負わされた裂傷と、付着する赤黒い液体の汚れからも知れる。ただ、それが何時頃に付与された物かは判らない。以前からの傷痕なのか、今少し前、並み居る黒鎧達によって負わされた物なのか。

籠手に守られた少女の手には、1本の剣が握られていた。刃は見事に研ぎ澄まされ、鏡のように少女を映す。標準的な幅と、長き刀身の両刃剣。少女は両手で、その無骨な柄を握り、正眼に構えを取っていた。己が視線の中心に刃を据え、その先より、緩やかに迫り来る黒き鎧の軍団を睨み見て。

少女の面貌を覆うのは戦意。四肢に宿るは闘志。全ての向かう先それは黒の鎧達。互いの関係が敵対以外に無い事は明らか。

刃先から黒群を睨みながら、少女の口が微かに動く。息を吸い、浅く吐き出す。

小さな呼吸を終えて、彼女が前傾姿勢を作った。双眸は細まり、漫然としていた闘争心が一点に集約していく。

鎧達の歩は止まらない。黒い塊は、少しずつだが着実に少女との距離を殺していた。

その先頭に在る一体が、後続の鎧に先んじて1歩を踏んだ。瞬間、少女が駆ける。

「ヤアアアアッ！」

裂帛の気合いを込めた一声を上げ、強く激しい踏み込みから走突。少女は銀髪を背にたなびかせ、重量物の鎧を着込んでいるとは思えない迅速さで、正面の黒鎧へ肉薄した。

緩慢な鎧とは速度が違う。黒が1歩を刻む前に、白は数歩を後にする。相手の懐へ潜り込むのは、当然にして少女の方が速い。

「ハアアッ！」

更に剛毅剛毅な呼気を吐き、少女は黒鎧の正面で手にする剣を大上段に構える。

次いで、躊躇なく振り下ろした。

明鏡の如き刀身が白の鎧を映して光り、そのまま黒の鎧を縦一閃に両断する。

相対物に抵抗する暇はない。頭頂から股下まで、少女の剣が鎧を駆け抜け、黒のそれを一撃で断った。渾身の残撃を見舞われて、黒き鎧は成す術も無く左右へ分かれる。丁度中心、完璧な垂直斬り、その為には鎧は左右対称としてそれぞれ反対方向に倒れいった。

けれど中から何かが出て来る事はない。空っぽ。真ん中から切り開かれた鎧の中、入る者は誰も無く、何も無く、鎧はただただ床へと沈む。

だが少女はそれを見ない。自ら寸断した鎧が崩れ落ちる光景を最後まで眺めず、剣が確かな手応えを得た後にはもう、別所へと意識を傾けている。

最寄の気配を敏感に察知して、彼女は目端で側方を捉えた。迫ってきた新たな鎧が、黒剣握る右腕を振り翳す。上体と共に腰を捻り、体後方へ大きく引いていた。

そこから次の行動までには息つく間もない。歩行速度の遅さに反して、鎧の攻撃速度は尋常に非ず。引いた腕を驚異的速度で引き戻し、黒の太く荒々しい剣身を横薙ぎに振るった。

腕の位置と剣の軌道からして狙いは1つ。少女の首だ。少女の露となっっている首へ、色白のそこへ真横から刃を叩き込み、速度と斬れ味を以って断ち切るつもり。あてずっぽの攻撃ではない。的確な狙いによる正確な斬道だった。

「フッ！」

だが無論の事、少女にこれを受けてやるつもりなど無く。彼女は強い吐息へ合わせ、反射的に身を屈める。

膝を折り、全身を落とし、体勢を低く。

半瞬後、彼女の頭上を、直前まで少女の頭があつた箇所を、黒の剣が薙ぎ刈っていく。風を断つ鋭い音が鳴った。

だが、それだけ。敵の攻勢は目標を逸し、失敗に終わる。

「ハッ！」

少女に安堵している猶予は皆無。刃が頭上を抜けると知るや、前へと踏み込みながら落としていた体を再度起こし。熱い息を一声の乗せ、攻撃直後の鎧目掛けて、寝かせた刃を振り払う。

真横に薙がれた少女の剣。それは黒鎧の腰部を捕え、横一文字にこれを斬った。右の脇腹から入った剣が左脇腹を抜け、胴体を両断された鎧が上下でズレる。

上半身と下半身が別々に倒れ行く中、少女はその様子から既に視線を外していた。片足に軸を置き、床を蹴って体向を変える。

斜め前方に立った別の鎧が、彼女へ向かい太刀を振るう。少女を叩き斬る為の一撃。彼女はこれにも素早く反応し、握る剣を黒の軌道へ割り込ませた。急速で下ろされる黒剣と、少女の長剣が刃をぶつける。接触面から瞬間的に火花が散り、黒い兜と少女の顔を同時に照らした。

鬨せめぎ合う刃を挟み、睨み合う両者。歯を食い縛り、規格外の力で押し付けてくる敵の攻撃に耐えながら、彼女は黒兜を臨む。対する相手は中に何も入っていない故に視線もなく、ただ空虚な目穴を少女へ注いだ。

拮抗する両勢力の力。その関係を破ったのは、群を成して襲う鎧の一体。

膠着状態に陥っている少女の背後に歩み寄ったそれは、黒剣を振り上げ、勢いに任せて振り下ろす。身動きの取れなくなっていた少女の背へ、黒い刃が兇相を叩き付けた。

「あうッ!?!」

少女の口から短い悲鳴が上がる。

背を打った敵撃は白の鎧を砕き、切り裂き、彼女の皮膚をも刃先で抉った。防具のお陰で深い打ち込みは防げたものの、黒の切っ先は少女の柔肌を薄手ながらも裂き、縦に傷口を作る。

割かたれた皮膚の合間から鮮血が滲み、白鎧の下を静かに流れ落ちた。これを設けさせた黒剣の先端にも同様の赤味が付着し、清涼さとは真逆の光沢を放つ。

「くう……」

背後からの斬撃をまともに受けた事で、彼女の両腕からは力が抜けてしまった。

その為に対面の鎧が繰り出す押し込みに抗え切れず、敵剣の進行

を大きく許してしまう。背中に走る痛みを堪え、腕に力を入れ直すも、これを押し返す事は叶わない。それ以上の攻め手を防ぐので精一杯。しかも背方には尚も敵を置き、周囲からは刻々と新手が迫ってくる。状況は極めて悪い。

それでも少女の瞳から輝きが失せる事はなく。彼女は両眼に宿る決意を一層強め、目へと更に力を込めた。

「おおおおおおオオオツ！」

自身を鼓舞するように咆声を上げ、少女が決死の行動に出る。

正面の鎧と刃を打ち合わせたまま、彼女は右脚を上げ、今正に相対している黒の腹を思い切り蹴った。具足に包まれた脚部が真っ直ぐに伸び、鎧の下腹部を激しく打つ。瞬間、突如生まれた衝撃に押しされ、鎧は蹈鞴たたらを踏んで半歩下がった。

それまで少女へと押し遣られていた剣が不意に力を無くし、若干の距離を空ける。

即座に彼女は動いた。

「りゃあああアアツ！」

気合いの咆哮を上げながら握る剣を斜め方へ振り上げ、敵方の黒剣を弾く。

そのまま手首を回し刃部を縦に直すと、勢い込んで斬り落とした。斜め一閃に走る袈裟懸けである。

背に纏わり付く痛みを意識の外へ追い出し、繰り出されたる清廉せんれん一条刀いちじょう下一擲いっしつ。その斬れ味絶大につき、黒鎧肩脇こくがいけんちゆうを綺麗に寸断せしめた。

右肩から左脇腹までを斬り断たれ、黒の鎧が背中から床へと倒れる。それにも構わず少女は高速的に反転。背後に立っていた鎧の胸へ、剣を突き込む。両腕に込められた彼女の力は年不相応に強く鋭

く、黒鎧の胸心を貫いて 刃先を背面より抜き出させた。

「ハッ！」

少女は鎧へ一瞥だけけると、短な息と共に剣を引き抜く。

直後、彼女の左大腿部へ別の黒剣が突き刺さった。具足上部を碎き、人体へ貫通した剣。少女の目が激痛によって見開かれる。

しかしもう苦悶は漏らさない。痛みを声上げる力さえも惜しむように、口を固く閉ざし、悲鳴を飲み込み。手傷を感じさせぬ軽快な動作で上体を捻ると、剣を振るって攻撃主たる鎧を撫で斬る。

最初に腕を飛ばされ、次に胸を深く斬り裂かれて、黒の鎧は床へと伏した。その様子にはやはり目もくれず、少女は自分の脚を貫く黒剣の柄を握り、唇を噛みながら一気に引き抜く。鎧の隙間から血が溢れ、抜いた剣先から赤い糸が引いた。

けれど、心休まる筈などある訳もなく。その最中にまた背中を斬られた。先とは別の位置、左寄り。

少女の顔が歪む。額に汗の粒が浮き出て、頬を伝い流れ落ちた。

その冷たさを彼女が感じる前に、右の脇腹へ真横から剣が刺さる。

相次ぐ痛撃に、少女の目が一瞬霞んだ。が、すぐに持ち直し、碎けてしまいそうな程に強く強く奥歯を噛み締めた。

正面を真っ直ぐに見、向かい来る鎧を睨む。そして、今しがた抜いたばかりの黒剣を片手で掲げ上げ、力任せに投げ付けた。空中を滑る黒剣は何物の妨げも受けず、狙い通りに黒兜の中心へ突き刺さる。

その顛末は見届てんまつけず、少女は脚を撓たわめて腰溜めに剣を構え、一瞬だけ精神を集中。目を閉じて、あらゆる感覚を無に帰すと、微かばかりの息を吐く。

刹那。

目を開けて右脚を大きく踏み、前のめりに上体を寝かしつつ、全力で剣を振るう。それは一体のみを狙ったものでなく、自らの周囲

全てを断ち斬らんとする全方位攻撃。半弧を描く剣の軌跡は、彼女へ迫っていた数体の鎧をまとめて胴体から切断。その動きを一撃で封じ込めた。

体を断たれた鎧達が床へ落ちていく。硬い鎧が、同じぐらい硬い床にぶつかって甲高い音を立てた。

少女はその音を耳にしながら、側面へ回り込んでいた無人の黒鎧へ対する。向き直り正面に敵を捉えた後、脇腹に刺さっていた剣を抜き取り、床へ放り捨てた。

「まだ……まだだ」

激痛に焼かれ朦朧となりかけ意識を懸命に揺り動かし、敵を睨みながら小声で呟く。自分自身へ言い聞かせるように。

血の気の失せ始めた顔で、尚も目だけは爛々と輝かせ、彼女は動いた。己が前面に立つ新手へ突っ込んで行く。一方の鎧もまた少女の突撃に臆さず、剣を振るって切り込んだ。

互いに前へと進み出る両者が、程無く激突。

黒剣が打ち下ろされて少女の左肩を傷付ける。白い鎧の肩部を叩き割り、露出した肩へと黒の刃を減り込ませ。代わりに少女の剣は突き上げ、まじかに迫った鎧の顎先へ触れさせた。そこから縦一直線に黒兜を打ち抜く。

兜の頭頂を少女の刃が貫いた時、黒剣の動きも止まった。彼女が剣を引くと、黒鎧は糸が切れた操り人形のように倒れてしまう。

鎧の倒壊と共に肩へ一撃を当てた剣も落ちるが、少女はそれを尻目に、玉座の側へと歩き出した。負傷した脚を引き摺るずようにして傷口から流れ出る血が床へ滴り、彼女の移動した後を点々と汚す。

当所の俊敏さを著しく欠いた動きではあったが、少女は敵勢の追撃を受ける事無く石造りの玉座へ辿り着けた。そこで振り返り、後方を見遣る。まだまだ大量の鎧達が犇めしき、全体の波は徐々に玉座近辺へ近付きつつあった。

「はあ、はあ……くっ」

少女の顔には汗の球が幾つも浮かぶ。

口から零れる吐息は荒く、苦しげで、常温以上に熱っぽい。

とうとう彼女は床の上へと片膝をついた。それでも手放さない剣を床へと立て、それへ継すがるようになんとか倒れる事だけは避ける。

しかし既に戦えるだけの力が残されていないのは、疑うべくもない。ましてやこの場から逃げ切るだけの体力とて、有る様には思われなかった。

それは誰でもない、少女自身が1番良く理解している。

「まだ、倒れる訳には……ハア、ハア……うう……」

傷口がジクジクと痛み、呼吸するだけでも痛覚が刺激される。

悔しそうに唇を噛み、少女は呻いた。

決意だけは依然として緩んでいないが、体がもう言う事を聞いてくれない。ゆっくりと流れ落ちる血液と共に、自分の命と力が失われていくのを感じた。

「御父様……御母様……どうか、今一度……私に、力を……」

少女は床に触れる剣先を一心に見詰め、切れ切れに言葉を紡ぐ。

覇気も活力も損なった、酷く弱々しい声。

薄まる意識を必死に繋ぎとめようとするも、それとて長くは続きそうになかった。

視界が狭まり、焦点が合わなくなる。耳も聞こえ難くなっていた。近付いてくる筈の多量の足音が、やけに遠い。

全身が刻々と重くなり、剣を握っていた手からも、力が抜け始め

3 筆目：天使降臨、可愛いだけが萌えじゃない

疲弊が限界に達し、全身の隅々から力が抜ける。

とうとう少女の手は剣から放れ、自分を支えられなくなった細い体が、硬く冷たい床へと倒れて行った。

方々が傷付き壊れた鎧を着たまま、重力に従いゆっくりとくず折れる少女。その最中、彼女の霞み果てた瞳は、漠然とながら不可思議な光景を見た。

何処からともなく飛んできた2つの光。それは優しく輝く光の球。暖色系の光を発す2つの球が、少女の視界で音も無く踊った。そうかと思うと双方が床へと近付き、突き立てられた剣の前で、一際眩く光を放つ。

それが治まる一瞬の後、其処には2つの人影が立っていた。片や、赤い衣を着た薔薇色の髪の少女。片や、翠の衣を着た碧髪まの女性。両者共にこの空間には不釣り合いな、煌きと清らかさを纏まとった存在。

「……………天使、様……………」

緩やかに床へ吸い寄せられる少女は、殆ど機能を止めた目に彼女達を映す。

2人の在り様に眩きを零し、そのまま床へと伏した。そして、意識を完全に手放す。

2人の天使は周囲を見回していた。

其処は彼女達の主が在り、彼女達が在った空だけの世界に非ず。始まりも終わりもある、広大な四角い空間。

「ほえほえほえ」

赤の天使は興味深げに其処等^{そこら}中へと視線を走らす。キョロキョロと忙しなく首に瞳を動かす彼女、その口から零れるのは、喜びと期待と興奮の声。

初めて見る場所、初めて感じる空気、初めて踏む世界、全てが初めてであるが故、彼女の好奇心と冒険心を存分に刺激しているようだった。

「此処は……主さまの世界？」

一方、翠の天使は目よりも他の感覚を澄まして、その場を探る。瞼を閉じずとも意識を張り、世界其^{そこ}の物の内に主の匂いを感じ取った。とは言え、それは嗅覚に拠^よるものではなく、肌を受け得、透過浸透してくるような気配に近いもの。或いは各種の構成物から滲み出し、漂う、独特な遍在因子。彼女は第六感的にそれを感じ、然る後に理解していた。

状況の変転理由が、金の髪の人^のの所業だと思に至るのに要した時間は僅か。その些末な経過内に確認出来た事は三つ。

一つは、その地が金髪の人の創り出した物語世界だという事。
一つは、黒い軍勢が幾らか前へと迫りつつある事。
一つは、彼女達の背後に傷付き倒れる少女が居る事。
得られた情報を統合し、彼女達は考える。主の意向を。そして自らの取るべき道を。

「あそこに倒れているのが、この物語の主人公のようね」

翠の天使は振り返り、床に倒れて動かない少女を見る。痛ましげな彼女の姿に、天使の双眸が若干陰を帯びた。

「ええ！？ 大変だよ、大変だよ！ このままじゃ、あの子は消えちゃうよ」

赤の天使は驚きの声を上げ、次いで大慌てに慌てて強い声を上げる。

両の拳を握り、胸の前で激しく上下に振りながら、必死の面持ちで隣立つ翠の天使へ訴えかけた。

「そうね。今のままでは、悲しいハットエンド終わり方になってしまっわ」

赤い天使の表情と仕草を見つつ、翠の天使は悲しそうに目を伏せる。

此の世に数多とある物語。その全てが望まれたハッピーエンド終わり方になるとは限らない事を、彼女は知っていた。中には一切の救いが無い絶望的な物語も、確かに存在している事を。

だがやはり、知識として憶えているのと、実際に自らがそれへ対し感じる思いは違う。頭では仕方ないと理解していても、心が受け入れない・認めない事もまた、彼女は良く知っていた。

それが為に今も、複雑な想いを抱えている。

「嫌だよ、そんなの！ 駄目だよ、こんなの！ 間違ってるよ！」

己の思考と心の葛藤に窮する翠の天使とは対照的に、赤の天使は隠すでもない感情を露とする。

硬く握った両手を振り回し、瞳の中へ激情を燃やしながら声を荒げた。彼女の思いを体現するように、背に生えた翼が大きく羽ばた

く。
「そっだ、変えちゃおう！ あの黒いの皆やつつけて、この子を助

けてあげよう！　ね？　ね！」

心に生まれた悲しみが、熱く激しい声になった。悲しい未来へ突き進む現状を、否定しようとする叫びになった。

彼女は思うままに口にして、またそれを実行するべく決意を固める。

例え自分達の創造主がこの世界を作ったとしても、彼女達の背後で倒れる少女の運命が決まっているとしても、それを『仕方ない事』として割り切る事は彼女に出来ない。否、したくない。

それが天に唾する行為だろうが構わない、赤の天使はそんな気持ちだった。今は自分の心に、思いに従って、迫る悲しみの結末を打ち砕く。それだけを考えていた。

彼女は縊^{すが}るような目で翠の天使を見、そして問う。懸命な顔で、万感の願いを込めて。

「……………」

翠の天使は即答しない。目を伏せて、何事かを考えている。

赤の天使が心に忠実なのへ対し、彼女はどちらかといえば理性的な性分だった。意思よりも思考を優先するくらいにある。そんな彼女の冷静で理的な部分が、主の創った世界へ、決められた運命へ、真っ向から叛逆する事へ警告を発していた。

創造主にして想像主、金の髪の人。彼の不敵な顔が脳裏に浮かぶ意識の中に現れた主を見ながら、彼女は考えを巡らせた。

彼は何を思い、自分達をこの世界へ導いたのか。この年端もいかない少女が、無数の悪しき存在によって凄惨な最期を迎える光景、そんなドス黒い結末を見せ付けたかったのだろうか？

確かに彼には気分屋などところがある。それに友愛に満ちた美しい正道の物語でなく、陰惨で残虐な黒に傾倒した物語をも書き上げる

事があつた。彼はジャンルを問わなかつたし、物語の締め括りに絶対のルールを設けてもない。本人の言葉通り『書きたいものを書く』のだ。

それでは、今回もそうなのか？ 何時もの気紛れで、自分達をこの世界へ放り込んだのか？

あの卵を孵す為の執筆作業。その片手間に、簡素な余興に、自分達を使い、悲しみと絶望に暮れる姿を肴にして、愉しんでいる？

…………… 本当に？

…………… 本当に？

…………… 本当に？

「そうね」

翠の天使が口を開く。

短な呟きと共に顔を上げ、赤の天使の面貌を見た。

少しの間沈黙を守り、無反応だった翠の天使。その様子を心配そうに、そして不安気に見詰めていた赤の天使。彼女は相手の発した言葉の意味をすぐには理解出来ず、両目を瞬かせる。

そんな姉妹天使の顔を見ながら、翠の彼女は優しく微笑んだ。

「悲しい未来は、誰も望んでいないもの。私達で変えましょう。あの子を救いましょう」

穏やかに、朗らかに、微風を思わせる静かな声で述べ、翠の天使ははっきりと頷く。

赤の天使が求めた案への、賛同と肯定の証。

これを見て、それを聞いて、漸う全てを理解して、少女天使は両眼を輝かせた。不安と緊張が支配していた面上へ、蕾が花開くように、満面の笑みが浮かぶ。

何よりも信頼を置く姉妹天使が、自分の意見を聞き入れ、それへ

協力してくれるというのだ。同じ思いを抱いて、願いを掲げて、未来を目指して、共に進んでくれるというのだ。彼女の安堵と喜びは、余人に推し量ることも叶うまい。

「ほんと？　ほんと！　やった！　やったッ！　有り難う！　うん、有り難う！」

両手を振って飛び上がり、着地してはまた飛んで、定位置で何度もジャンプを繰り返す赤い衣を着た天使。

薔薇色の笑顔を広げ、全身で喜びを表現しながら、少女は何度も何度も飛び跳ねる。

その姿を優しい眼差しで見詰めながら、翠の衣を着た天使は口唇を揺らした。

「主さまが私達を此処へ寄越したのは、きっと、私達自身の力で結末を変えてみせると、そう言っているんだわ」

それは確信を込めた言葉。思考の果てに辿り着いた、1つの答え。彼女は創造主本人ではない。だから本当の所は判らない。けれども、彼女は自らの結論に絶対の自信を持っていた。

我が主の胸中を見知っている、そんな事を言うつもりは無い。ただ真実が何処にあれ、彼女自身はそれが正解だと思ったのだ。思い悩む必要はない。自分の信じた道を、突き進めばいいと、彼女はそう気づき、また結論付けた。

そう考え、そう在る様に自分を創ったのは、他ならぬ創造主本人なのだから。

「変えましょう。悲しい未来を、素敵な未来へ。その為に、戦いましょう」

「うん！」

翠の天使の呼び掛けに、赤の天使は強く深く頷き返す。

それと同時に、2人は揃って向き直る。自分達へ、そして背後の少女へ迫らんとする黒き鎧の群へと。

互いの距離は、既に然してない。

「よーっし！ やつるぞおーッ！」

赤の天使は声高に叫び、両手を肩の高さで左右水平へ伸ばす。

と、次の瞬間、彼女の掌双方へ赤い炎が爆ぜた。一瞬後、舞い散る焔ほむに彩られ、天使の両手へ巨大な戦斧せんぶが出現する。

少女の身長程もあるつかという長大な柄と、その先端に備え付けられた左右両対の斧刃。それは天使の瞳と同じ緋色に輝いていた。

赤の天使は両手へそれぞれ巨大戦斧を握り、これを1度大きく振るう。小さな火の粉が得物の動きに合わせて宙を滑り、僅かに赤味を増して消え去った。

少女天使は細身、細腕、華奢な容姿にも関わらず、見るからに重そうな大斧を苦もなく扱う。まるで重さなど存在していないかのようにな軽々と、易々と。

そんな斧を自らの正面と側方とに構え取り、天使は相対する黒の軍団を厳しい目付きで睨んだ。

「私達は決めたんです。ならば後は、走りきるだけ。絶対に、遂げてみせる」

翠の天使は目を瞑り、安定した声音で、しかし確固とした意志を込めて告げる。

それと共に右手を自身の体前へ伸ばし、開いていた掌を、何か掴み取るように閉じ始めた。瞬間、彼女の右手内から碧の光が一閃となり走り、その後に碧緑の大弓が姿を現す。

これまた天使の身長近くはあるつかという長弓。押付と手下がそれぞれ翼の形をした特徴的な弓だ。その形状は宛ら、彼女の頭から出ている翼のよう。

翠の天使は横に寝かせていた大弓を、手首回して縦へと戻した。そうして「うたはず」と「もとはず」を繋ぐ碧光の弦へ左手を添える。人差し指と中指を第二間接から曲げ、矢柄を掴むような形で弦を引いた。

彼女の体側へと大きく絞られた碧弦、そこと矢摺サイトの間に、翠の光で作られた矢が生まれる。碧の天使は衣と同じ色合いの矢先を、向かい来る鎧群へ定め、目を細めた。

「誰も願う望まれた終わり方の為に、悲しい終わり方を倒します」

各々が武器を手に、居並ぶ赤と翠の天使。彼女達の口から、全く同時に同じ言葉が語られる。

2人の声は重なり震え、空間全てに響き渡った。

その声を聞いたのか、天使の背後で倒れる少女の体が微かに動く。その声を聞いたからか、天使の眼前に迫る鎧達が歩を止めて、一斉に黒剣を振り上げた。

訪れる微かな静寂。

齎もたらされた無音の一瞬。

交差する視線と空虚な洞。

そして動き出す時間。

翠天使の左指が光矢を放し、赤天使が戦斧を振るって走り出す。

黒の鎧が、大群が、波となって押し寄せる。

定められた結末を変えようとする者と、それを阻み本来の未来を招こうとする物の、終わりを賭けた戦いが今、始まった。

4 筆目：戦闘絶華、いざ勝利へ

翠の天使が放った光矢は宙空を駆け抜け、寸分変わらず標的となつた鎧を貫く。

輝く一矢が大気を裂き、到達した黒の鎧。その胸部を食い破り背方から抜け出ても尚、矢の勢いは止まらない。依然として鋭い貫徹力を有した矢は、狙われた鎧の後方に在った別の物の胸をも打ち降り、更なる後体を立て続けに襲った。その数、実に5体。

初撃の矢だけで五つの鎧を破壊した後、天使は次の矢を番え^{つが}ている。碧の弦が彼女の左手で引かれ、それへ合わせて翠の光が矢を形作った。その数は3本。人差し指と中指の間に一つ、中指と薬指の間に一つ、薬指と小指の間に一つ。天使は左手五指を大いに使い、三つの矢を同時に生み出していた。

「せやッ！」

瞬間的に狙いを付けて、掛け声と共に固めていた指を開く。

彼女の手から解き放たれた翠の光は、3本揃って同速へ至り、しかし向かう先は異にして空間を走った。放射線状に飛んでいった3本矢は、各々に標的が中心部、鎧の真中を射抜き、一つ目の後に二つ目、二つ目の後に三つ目、そのまた後に……止まる事無く次々と敵体を穿ち倒す。

その狙いは百発百中。一度弓より放たれた翠光の輝矢からは、何人も逃れる事は出来ない。定められた軌道に立つ物達が、回避の間も与えられず撃滅の煽りを受ける。例外は無かった。

三方向に飛んだ矢が黒の鎧を撃ち抜く最中、赤の天使もまた敵勢を相手取る。

彼女は敵陣の中へ单身飛び込み、両手に握った2本の戦斧を振る

い戦った。恐れも怯えもなく、ただ目的達成のみを見詰め、求め。

「たあああッ！」

激烈な気迫を伴い吐き出される鬨声。

それが導くのは、少女天使の外見に似合わぬ豪快にして猛然たる戦いぶり。

右手にする大斧を垂直に振り下ろし、眼前に在った黒鎧を兜頭頂から叩き潰す。それと同時に左手を横へ振り払い、そちらに握った剛斧で側方の敵を2体まとめて吹き飛ばした。

彼女の重撃を受けた鎧達は、自らの防御力を何処かに置き忘れてきたかのように、まるで紙の如く易さで打ち砕かれていく。天使の右手が動き、最寄の鎧を左右へ両断。左手が振るわれると、近寄ってきた鎧が腰を境に寸断された。

「ええええいッ！」

魂の荒声を響かて、少女天使は床を蹴る。

体前で両腕を交差させ、戦斧をクロスの形に構えて。正面に群がる鎧達へ真っ直ぐ突っ込んだ。

敵軍の腕は彼女の接近に際して次々振り上げられ、断頭台を思わせる凶悪さを示す。だが天使は止まらない。只管ひたすらに駆け続け、黒の壁へ正面から挑む。一切緩まぬ歩は互いの間合いをすぐに詰め、攻撃範囲への両勢突入を為した。

それへ反応した黒の鎧が、同色の剣を振るう。しかし、それよりも赤の天使は僅かに速く腕を走らせた。

交差させる両手を同時に引き、抜き払う。握られた双斧が大きく唸り、大気を裂いて各々真逆別方へ。反身の大刃が天使の眼前で『バツ』の字を描き、相対していた鎧衆へと強く減り込んだ。後はもう動きを止めず、勢いを維持した状態から触れた全てを引き裂き、

断ち割り、^{つし}拉げさせ、押し潰す。

防御を許さぬ大威力の斬撃。これは黒き鎧を深々と抉り、装甲を斬り飛ばして内奥から捲り上げさせた。砕けた鎧が黒の破片を撒き散らしながら、緋色の刃に押し遣られ、数体まとめて床へと打ち捨てられる。

大斧の直撃を受けた鎧は完全に破壊され、殆ど原形を留めぬ程に変容していた。無人であるが故に天使には容赦がなく、手心無しの全力攻撃で屠り散らす。

「ほええ!？」

攻撃を終えた彼女は、蠢く^{うご}気配の波に気付いて驚きの声を上げた。首を巡らし探ってみると、何時の間にもやら黒の群が彼女を囲んでいる。戦の渦中で歩を踏み続ける鎧共が、四方から迫って少女の退路を塞いでいた。それらと天使の間には、既に幾らも距離がない。黒の集団が剣を掲げ、彼女へ斬撃を見舞うべく、各自が素早く振り下ろす。

「こんのおおッ!」

視界に入る剣の動き。それをハッキリ捉え、赤の天使が灼度の増した戦意を吐く。

その響きは更に熱く、怒号に近い喝激が周囲を巡り。自身の声を耳に受け、天使は今しがた倒したばかり、足元に転がる鎧の残骸へ脚を掛けた。両脚に力を込め、鎧を踏み台とし、足裏との接点を蹴り上げて、高らかに跳躍。

天使の体が真上へと舞い上がり、数瞬前までの立ち位置を、黒剣の奔流が切り刻む。

無機質な空間の高き天井へ、近付かんとする赤の少女。彼女の華奢な体が宙空で背中から一回転し、合わせて緋色の戦斧が円を描い

た。

軽やかに舞い、美しく回る少女を見上げる鎧達。今の今まで彼女を囲んでいた連中には、その向きが顕著。かくして数秒からなる滞空時間は終わり。

「つやああああッ！」

荒々しくも澄んだ活哮が大地へ注ぐ。

声の主たる赤い天使は、自分の体面へと両腕を揃えて振り下ろし、重力の頸木へ引かれるまま落下した。赤の衣をはためかせ、天使が床へと、黒の軍勢へと再び飛び込む。今度は上から、大斧を下向け。少女天使の体は空気層を打ち、制動も無しに、先の飛翔始点へ一直線から到着した。瞬間、彼女の両脚が踏み叩いた鎧の残骸が完膚なきまでに砕け散り、破片と共に粉塵を巻く。足元の床面には僅かな罅割れが生まれ、前方では真上から打ち下ろされた斧刃に黒鎧が押し潰された。

にも関わらず、少女は無傷。高みから落ち、自重と武器の重量を加味した分の圧力・衝撃が全身へ、特に脚へ掛かった筈だというのに、微かな痺れさえも感じさせない。天使は痛みに顔を顰める事も、小さな嗚咽を漏らす事も無く、すぐさま次行動へと移る。

「とおおおおりやああああアアアアッ！」

両手を左右水平に持ち上げて、天使は激号を謳い叫ぶ。

自身の一声を合図として、体内で熱を爆発させ原動力に。両腕を上体毎捻り、戻す反動で巨斧を思い切り振り回した。刃の快閃が赤の軌跡を空へ刻み、過程に在った全てのものを叩き斬る。

周囲へ漂う粉埃の灰煙が、薙がれた斧の風圧で上下に割れた。そのまま霧散し視界が改めて確保された時、緋色の刃が打ち据えた十数の鎧は腕を、胸を、腹を、脇を、事々に各所を断たれ、床の上へ

崩れ落ちる。

それでも満足しないように天使は大斧を振るった。新たに近付く黒を頭上から叩き割り、側面から剣を構えて突き込んで来た敵を裂いて飛ばす。返す刃で振るわれた斧刃が、先端に鎧を引っ掛けた。彼女はそれにも構わず腕を動かし、黒鎧を容易く放り投げた。宙を舞わされた鎧は程無くして幾らか離れた床へ頭から落ち、自重に負けて碎けて止まる。

猛攻を続け、並み居る敵鎧を討ち取っていく赤の天使。だがその背後へ、高く剣を構え上げ襲い掛からんとする新たな敵影が立った。彼女がそれへ反応しようとした時、両脇からも黒の剣が突き出される。反射的に腕を薙ぎ払い、斧刃で二つを叩き落した天使。けれどもその迎撃行動が災いして、背後からの攻め手へ対する気を逸した。

彼女が体勢を立て直した時にはもう、黒剣の斬撃活動は始まっている。

「あっ!？」

天使は肩越し目を見張った。今回ばかりは防ぎようも、躲しようもない事を理解した為に。

黒鎧が誇る尋常ならざる臂力じよりぢかくによって、大きく振るわれる刃。風断つ黒の速度が、今正に少女の背中を断ち斬る。

「そこッ!」

空間へ轟いた、凜とした声。

その出所から翠の光が飛び、赤天使の背を皮膚を、獰猛に無遠慮に抉らんとした黒剣へ激突。光の矢が剣を折り、天使の背を守り、次いで剣の所持者が胸部を貫く。

胸を撃ち抜かれた鎧は数歩後退り、只の鎧と同じ様に倒れ、活動を停止。砕けた剣が送られて床に落ち、硬い異音を響かせた。

「わ、わわ、有り難う！」

危機的状况を救ってくれた姉妹天使へ、赤の彼女は笑顔を向ける。これを受ける翠の天使は柔らかく微笑んで、視線を別方へ移した。その時にはもう真剣で強健な面持ちとなり、左手を動かして新たな矢を番える。

右手を斜め上方へ向け直し、碧の弦を引いて光矢を作ると、一瞬で標的を定めて指を放した。解き放たれた三対の翠光は空中へ飛び、放物線を描いて三方向別々へと飛来する。

翠の一つは歩き行く鎧の頭部、黒の兜へ頭上から減り込み、空洞の鎧内を下って股下までを貫通。

翠の一つは赤の天使を狙う鎧の背後から胸部を貫いて、成す術も無く床へ倒した。

翠の一つは彼女自身へ近付きつつある鎧の兜中心へ斜めに突き刺さり、それ以上の進行を止める。

天使の正確無比な射撃は、それまで一度して失敗していない。全てが狙い通り、鎧という鎧を容赦も憐^{れんひ}悲もなく穿ち尽くしてきた。驚異的な集中力、そして胆力の成せる技。

「これで、終わりに」

確固たる決意を込めて、翠の天使は静かに言葉を紡ぐ。

彼女は弓を握る右手を高く天上へと向け上げて、輝く弦に左手を添えた。そのままゆっくりと抓み引き、1本の矢を生み出す。それは翠の明光を激しく発す、今までで1番太く大きな矢。

天使は新生させた大矢を限界まで引き絞り、遙か天空を見据えた。

「します！」

絶対の覚悟を秘めて、天使は言葉を言い切る。

同時に、矢から指を放した。碧の弦が瞬間的に震え、番えていた野太い矢が天井へ向かい飛んだ。彼女は続け様、もう一度弦を引いて1本の細い光矢を作る。そして今撃つたのと全く同じ場所へ次矢を射った。

速度は後発の方が上。先に撃たれた太矢が空間の最頂点まじかへ達した時、後を追うように走る細矢がそれへ命中。二つの光が遠き空中で交わり、翠の閃光で世界を照らす。直後、大矢は数百に及ばんという多量無数の光矢へ変じ、床面一帯全てへと一斉に降り注いだ。

それは正しく光矢の雨。夥しい数の矢が、翠の光が、黒の鎧達を容赦なく襲う。頭上から舞い落ちる矢の榴雨は、黒の軍勢が肩を、腕を、脚を、膝を、爪先を、腹を、胴を、肘を、手を、頭を、全てを射抜き、たちどころに打ち倒した。

回避など不可能。逃げ場など何処にもないのだから。鎧達には無情な翠の洗礼に全身を晒す以外、出来た事はない。

降り頻る翠の矢に撃ち抜かれ、動いていた黒の鎧は床へと崩れていく。次々と、続々と。

その戦いは圧倒的と言えた。天使は僅か2人。対して黒の鎧達は40倍近くに及ぶ。その数的差は圧倒的。

だがそれ以上に圧倒的なのは、天使達の誇る実力である。彼女等は数の不利を物ともせず、正体なき鎧群へ敢然と立ち向かい、これを圧倒したのだ。

天から落ちる無数の矢が終息を迎えると、後にはもう主だった敵の姿はない。ほぼ全ての鎧が幾多の穴を開け、防具としての機能を損ない、床一面へ散ばり果てるのみ。その場へ立っているのは、翠の天使と赤の天使。どちらともに無傷であった。

恐ろしいまでに矢雨が降り注いだというのに、天使達には掠りもしていない。そしてそれは、玉座の傍で依然として倒れたままの鎧着た少女にも言える。彼女の体は先の戦闘で黒軍から受けた傷以外に、新たなものは無かった。

そんな黒一色に埋め尽くされる原野の只中で、赤の天使は両斧を握り直す。彼女の目が捉えるのは、唯一一体立ち残っていた最後の鎧。尤も、それでさえ左肩へ矢を受けたらしく、腕部分が喪失してはいたが。

「これで」

少女天使が両腕を振り上げる。
右脚は深く踏み込み、双瞳に敵を映した。

「終わりいいいッ！」

最後の一喝へ力を込め、天使が床を蹴り上げる。
小柄な体が宙へ跳び、鎧目掛けて急降下。それと共に振り下ろされる両腕。緋色の戦斧が豪速として、黒の鎧を頂点から叩き潰した。渾身の力で圧壊された鎧は無数に弾け、周囲へ散ばる。その基点へ、赤い天使が髪を揺らしながら華麗に着地した。

「っ　　勝ったああああ！」

床へ降り立つや、少女天使は両手を高らかに突き上げ、戦斧を掲げて歓喜の声を上げる。

それまで纏まとっていた緊張感を全て解き、硬かった表情を崩し、心底から嬉しそくに、満面の笑みで叫んだ。少女の元気な声が、四角い空間中を満たす。

彼女の姿を見ながら、翠の天使も顔から険しさを消し、柔和なそ

れへと戻した。弓を掴む手を下ろし、控え目な安堵の吐息を零す。赤天使のように大声で騒がないながらも、彼女は姉妹へ負けぬ程の喜びを感じていた。胸の奥にて確かな達成感を噛み締めつつ、湧き上がる甘く穏やかな感情に心を浸す。胸中を潤す温かな思いに、天使は我知らず口許を綻ばせた。

「これで、あの子も大丈夫だよな」

ステップを踏むような軽快さで振り返り、赤の天使が笑いかける。少女の笑顔に面と向かう翠の天使は、朗らかな微笑をそのままに肯定の頷きを返した。

「ええ、そうね」

言葉は少なくとも天使達の心は充分に通じ合っている。

それを証明するように、少女天使は殊更ことごと明るい笑顔で、首を大きく縦へ振った。

彼女達の心と体を満たす心地良い充足感。平淡な日常を送っているとは得難い感情。その馨かぐわしさへ胸弾ませて、2人は視線を絡める。次いで一緒に破顔し、春風を思わせる可憐な笑みを浮かべ合った。崩れた鎧から漏れ出る死臭によって汚された空間の中、それでも美しやかな清涼さを損なわぬ天使が2人。互いに見詰め合い、笑い合う彼女達は、其処に居るだけで何もかもを浄化しているかのよう。満ち満ちて黒く漂う死の気配さえも、居並ぶ乙女達には近付けないのか。2人の周りだけは生気が芽吹いているように感じられた。

が、しかし。

「やくれやれ。僕の可愛い玩具達を、随分とケチヨンケチヨンにしてくれたねえ」

唐突に、空気が重くなる。

空間全てを覆う死臭が濃度を増し、闇の気が急激に深さを強め始めた。

何処からともなく響いてきた声が、その呼び水。

「僕はね、他人の所有物を滅茶苦茶にするのは好きだけど、自分の持ち物を触られるのはとつても嫌いなんだ」

低く響く、闇色の声。

聞く者の神経を逆撫でするような、気味悪く不浄さを塗り込めた音。

2人の天使は姿なき声に驚きを浮かべ、けれどすぐ表情を引き締めて周囲を見回す。

背筋を這い登る粘つく気配、まるで全身を嘗め回されているような嫌悪感。ただ声が聞こえるだけで、2人はかつて感じたことの無い奇妙極まる感覚に襲われた。どれほど振り払おうとしても、それは引かず、離れず、寧ろ刻々と負の領分を侵しているかのよう。

赤の天使は思い切り、翠の天使は控え目に、両者揃って眉根を寄せ、不快感を露にする。

「そんな事されると怒ってね、ついやつちゃうんだ」

怒っているような、笑っているような、泣いているような、抑揚が出鱈目めだまで、状態を把握しきれない不気味な声。

その響きが這い寄り、のたうち、暗く、激しく、天使達を包む。

彼女達の目が細まり、武器を握る手に力が込もった。

「こんなふうに」

言葉に合わせて、黒色の風が吹き抜ける。

生臭く、湿っぽく、それでいて逃げ切られず、撫でた相手の体へ纏わり付く、異形の風。

天使達の顔に戦慄が走った。

「ね」

直後、赤の天使は背中から床へ叩き付けられ、そのまま勢い良く後方へと滑って行く。

砕けた鎧の残骸が散乱する床を、異常な速度で体が流れ、転がれる破片に頭や腕、肩に脚をぶつけながら。背中を激しく擦りつけ、かなりの距離を走らされた。

「うああああ！ ……くううのおおツ！」

天使は全身を襲う激痛に歯を食い縛り、手にする大斧の石突部を床へ打ち付ける。

両手が同時に動き、二つの斧が床を噛む事で、彼女の体進行はやっと止まった。自由が戻るや、少女天使は斧を支えに起き上がる。自分が進んできた道だけは鎧片が綺麗に吹き飛んでしまい、本当に1本道のように。それを瞳にしながら、天使は最初の立ち位置、基点となった箇所を睨んだ。

「うう、う」

天使の唇が震え、苦悶の呻きが零れ出る。

背中 of 皮膚が幾らか剥けて、血が滲んでいた。ズキズキと痛みも走る。それは背中だけでない。少女の両腕、前腕部分にも、見慣れ

ぬ傷が刻まれていた。赤い衣の袖が破られ、腕にはくつきりと何かに引っ掛かれたような痕が残っている。そこからも血が小さな粒となって滲み、継続的な鈍痛を与えた。

何があったのか、自分が何をされたのか、天使にも判らない。あの気味悪い声が聞こえた瞬間、気付いた時にはもう、腕と背中**に強い衝撃を感じて床を滑っていたのだ。**

天使の頭が回る。得体の知れない存在を前に、軽度の混乱をきたしていた。

「誰ですか」

不可思議な現象に心乱している赤の天使に代わり、翠の天使が厳しい追求の声を投げる。

そこには有無を言わさぬ迫力があり、凡百の者ならば竦み上がって問われるまま、全てを話してしまうだけの威圧感があった。

けれど、残念ながら返事はない。ただ、空間中を満たす空気の重さと黒さが増しただけ。或いはそれが、『何者か』の答えだったのかも知れない。

翠天使の頬を、冷たい汗が一筋伝う。嫌な予感がした。胸中で燻くすぶる不安が、次第に大きくなっていく。恐怖の感情と共に。

少しして、赤の天使が睨み見る空間上に、ぽつんと、小さな黒い染みが生れた。

翠の天使が怪訝な顔でそれを注視した時、染みの一点は墨汁を零したような不規則で非均整な形で、周囲へ広がり出す。拡大する染みは黒い滴りを落とし、それが付いた床からは異臭と黒煙が仄かに立ち昇った。

奇妙な染みはある一定まで広がると動きを止め、今度は巻き戻し映像の如く収縮を始める。但し、広がった時と同じ軌道は辿らない。もっと別の、異なる動きで真ん中へと集まり、しかもそれが人の形

になっていた。

黒の染みは、確かに人間の姿を取る。人型へ集まり終わると、今度は黒い炎を放って燃え上がった。燃える染みが、更なる異臭を放つ。臭気が濃くなる事で、それが死臭だと知れる。

一連の光景を見詰めたまま、翠の天使も赤の天使も動けなかった。その染みが何か邪悪な者を顕現させると本能で直感していながら、四肢が固まったように動かない。彼女達の意味を全く反映せず、指先一つですら操る事が出来ず。

「う……何故、これは」

予期せぬ事態に齒噛みしながら、翠の天使は燃え立つ染みを見守る。

そんな物は見たくなかったが、見る以外には出来なかった。首も動かず、瞬きすら封じられていたから。

その間に、黒の炎は現れた時と同様、不意に掻き消えた。失われた染みと入れ替わるように、その場へ佇む人影を残して。

「ふふふふ、こんばんる〜」

陰惨な声音に乗せて、ソレが笑う。

黄金の欠片が塗まぶされた蒼い外套で、全身をくまなく覆う者。笑顔で天使達へ対する者。

そう、ソレは笑顔だった。しかし顔は判然としない。何故ならソレが浮かべる笑顔は固定化されて、それ以外に無いものだからだ。左右を蒼と金とで塗り分けられたピエロの仮面。天使達が見たソレは、不気味な笑顔で形作られた道化の面。素顔はその奥へ隠され、見る事が出来ない。

5 筆目：黒色道化、正義の味方は邪悪者

薄ら笑いを浮かべたピエロの仮面。それを被った正体不明の存在。姿形は人の物。されど、ソレが纏う深淵なる闇の気と、濃厚な死の臭いは、ソレが見た目通りの生物でない事を雄弁に物語っている。天使達はソレを見ながら息を飲んだ。道化の仮面を被った『何者か』と、対峙しているだけで身が竦みそうになるのを必死で堪えながら。足元から頭の先まで、全身を包み込むような不快感に耐えながら。

一瞬たりとて気が抜けない。そして目も離せない。もし少しでも注意を逸らせば、それだけで命を奪われる。そんな強迫観念までが、彼女達の内には芽生えていた。それ程までの邪気を、悪意を、害意を、狂気を、ソレは内包し、大量に放射する。

「何者、ですか」

恐怖に、強大な圧力に、ソレの雰囲気屈しそうな心を叱咤し、強く持ち直して、翠の天使が問う。

相手を真っ直ぐに見詰め、言葉を吐き出すのさえ苦しそうに。

「僕の名前？ そうだなあ……黒色道化、或いは道化面どっけめんと呼ばれているよ」

見た目そのままな俗称。だがその名乗りだけでさえ、凄まじい威圧感を伴って響き渡る。

まるで巨大な黒の波だった。ソレが自らの呼び名を口にした瞬間、言霊とでも言うべき波動が、黒の奔流と化して天使達を襲う。彼女等の全身を吹き曝し、陰鬱な御手で撫でるかのよう。

これを受けた赤と翠の天使は、揃って背筋へ怖気を走らせ、無意

識に身を強張らせた。表情にとつくに硬い。

「な、なんなの？ なんなの？」

腕と背中中の痛みさえ忘れる程の恐怖心、嫌悪感、それへ全身を震わせて、赤の天使が口を開く。

喉までも小刻みに震えている為、まともな声は出なかった。

既に元気も叛意も失われている。今はそれを胸に灯す余裕すら、相對者の圧力を前に押し潰され、磨り潰され、原形なく果ててしまふ。ただただ疑問が、相手の正体に関する答えを求め衝動のみが存在した。それは未知の存在を少しでも理解する事で、底知れない恐怖を僅かでも解消しようとする、無力に等しい抵抗から来ていたのかもしれない。

「なにつて、コレさ」

ソレが、道化面が、嗤いながら外套を振るう。

蒼の大衣おおいが靡なびき、その内側から白い手袋を嵌はめた腕が伸び出た。

道化面は現した右手を胸の前に掲げ、手の甲を天使達へ向ける。彼女達の瞳に映る白布の中心には、深紅の十字架が描かれていた。

「それ、は？」

示された紋章を見つつ、翠の天使が疑念を零す。

それは見た事のない印だった。血の様に赤い色彩が、縦横に描かれ交わるだけの単純な作り。十字の四方先端が鉤状となり、多少の意匠は施されているものの、それ以外に特別な設えはない。

「聖十字教会。世界の守護者たる証だよ」

道化面は右手を前へと押し出し、手袋に刻まれた文様を誇示するように嗤^{わら}う。

確かに笑声ではあるものの、その声には怒気や悲哀すら感じるような気がした。幾多の感情が滅茶苦茶に澱^{よど}んでいるような声。いや、そこに感情はなく、ただ言葉の形が、声調が、多数の言い様を含んでいるだけ。

底冷えのする邪悪な哄笑を上げ、仮面の者が1歩踏み出す。

「僕はこの世界を護る権限を与えられている。世界の均衡を崩しかねない大きな力を狩り取って、世界のバランスを保つのが仕事さあ」

起伏が激しく安定しない語調のまま、道化面は語る。

語りながら床を進み、天使達へ道化の仮面を向けていた。

対する側は極度の緊張から身動きの取れない状態で、辛うじて視線だけを仮面の者へ定めている。ソレの動きに合わせて焦点をずらし、常に視界の内へ奇抜な存在を据え置いて。全神経は道化面の一挙手一投足へ集中し、その何物も見逃すまいとした。僅かでも意識を他へ逃す事は、危険極まりない選択である。

ソレは抜き身の刀剣か、はたまた何時爆発するとも知れない不発弾、若^もしくは今にも壊れそうな吊り橋と同じ。少しでも目を離せば、誰もが恐れる最悪の状況を引き起こしかねない危険分子なのだ。否が負うにも動向へ注意が深まる。ソレへ抱く根源的な恐怖心・警戒心も相まって、天使達は道化の声へ耳を傾け、逐一動きを監視し続けた。

「其処に転がってる小娘はね、この世界にとって危険な存在なんだ。そいつの先祖は昔、とてつもない魔力を振るって世界を混乱させた一族だ。その末裔は力を失って久しいけれど、何の拍子で戻るか判らない。危険だろお？」

天使達の不信感漲る視線を受けても、道化面に堪えた様子は皆無。そんな事はお構いなすと、意にも介さず舌を動かす。仮面の奥から放たれる変質的が特徴の不可思議な声は、笑いを含みながら続けられた。何が可笑しいのか、天使達にはさっぱり判らないが。

「だから、消さないといけない。これは僕の御仕事なのさあ。全てはこの世界を護る為だ。僕等は正義の味方だからねえ」

言いながら歩く道化面は、翠の天使の真正面に立つ。

天使が笑顔の仮面を強く睨んだ時、ソレは滑るように床上を駆け、殆ど一瞬で彼女へと肉薄した。

ピエロの仮面が、天使の顔のすぐ傍にある。それこそ、互いの息が掛かる程の近くに。そんな至近距離で、道化面は上体を屈めるようにし、翠天使の耳元へ顔を突き出した。

彼女はまるで金縛りにあったかのように動けない。濃厚な闇と死臭をまじかに感じながら硬直する。その様子を、赤の天使は姉妹へ対す心配と、道化への怒りという双方の感情から見遣っていた。彼女にも、見続ける以外には出来ない。

「判つたら、もう邪魔をしないでくれるだろお？ 僕の玩具を片したのは、何も知らなかったからと大目に見よう。さっきの一撃で手打ちにしてあげるから。いいね、もうお家にお帰り。おじよおさん」

耳元で囁かれる、闇色の声。

吹き付けられる、死の吐息。

翠の天使は、全身の血液が凍ってしまうような錯覚に陥った。聞こえてきたのは、それ程に昏く、冷たい声。安易に否定出来かねる、強制力を持った言葉。暗に突きつけられた要望という名の命令。

この瞬間、天使の胸中に、葛藤とも言える思いが渦巻く。

何も考えず今直ぐに頷けば、この圧迫感から逃げられる。どうしようもない闇から離れ、光の領域へ戻る事が出来る。それはとても魅力的な選択だった。耐え難い邪気を、狂気を、死を纏まとう存在から関係を断つて逃げられるのだから。思わず、本当に了承の合図を返してしまいそうになる。

けれど本当にそれでいいのかと、胸の奥から、理性の内から、疑問の声が聞こえた。目の前へぶら下げられた選択を受け入れる事へ、警鐘を鳴らす心。彼女の強い部分が、道化面の言葉へ対し反発をする。

もしこのまま去るならば、確かに自分達は大きな脅威から逃げられるだろう。安心と安全の世界へ返り咲き、何するでなく安寧あんないの間を過ごす事が出来るだろう。

だがそれは、悲しい終わり方を認めた事と同じではないのか。この物語が望まれぬ形で結ばれるのを容認し、悲しみの現実から目を逸らし、仕方無かったと自分以上を護る。

それで本当にいいと言えるのか？ 恐怖に屈し、悲しみに抗う事もせず逃げ出しているのか？ それで本当に自分達は本望なのか？
それが1番やりたい事なのか？

否である。断じて否である。

彼女の心が叫ぶ。理性でなく、思考でなく、激情の部分が咆哮を上げる。

自らの保身が為に、自分の心を捻じ曲げ、押し殺し、認めたくない現実を目を閉ざし。何か出来る事があるのに、怯えた心に従って何もしないで走り去る。そんな真似をしたくはないと。臆病者にはなっても、卑怯者にはなりたくない。

それと同時に、赤の天使と共に悲しい終わり方を変えようとした時の思いが、胸中へ去来する。道化の迫力に圧倒され失われた熱意が、もう一度確かな温度を持って燃え上がり始めた。

再燃する決意が彼女自身の声を導く。このままで良い筈がないのだと。

その思いは紅蓮の炎となって駆け巡り、彼女へ怒りの感情を呼び起こした。道化面の言葉が甦り、それへ対する抵抗心が、反発心が、急速に膨らんでいく。

心奥に灯った激熱の光は、恐怖に竦んでいた天使の体に渴を入れ、見えざる抑え手を払い除けた。

天使の両瞳に、決意と覚悟が明らかかな色合いを以って宿される。それは自らの進むべき道を見付けた者特有の、確固とした輝き、信念の瞬きだった。

「いいえ、帰りません」

翠の天使は相対者へ強い眼差しを向け、キツパリと否定する。

それと共に左腕を振って、道化面を押し退けようとした。だが天使の腕は何にも触れず、虚空を撫でるに終わる。

彼女が行動を起こすより半瞬速く、道化面は軽やかに1歩退いて、人1人分程度の距離を開けていた。

「おやあ、それはどういう事かな？　もしかして僕の御仕事を手伝ってくれるのかい？　だったら、それには及ばないよ。あの小娘1人グチュグチュの肉塊に変えるなんて、ワケないからねえ」

害意をふんだんに盛り込んだ暗色の嗤いを返し、道化面は外套の裾を揺らす。

そんな相手へ、翠の天使は毅然とした態度で応じた。

「貴方の手助けをするつもりはありません。寧ろ、その逆です」
「ほほお？」

真つ直ぐに天使を見る仮面の奥から、可笑しそうな声が零れ出る。翠の天使はそれに構わず、自らの抱いた思いを言葉に変えた。

「貴方の役割は聞きました。あの少女が、かつて大きな過ちを犯した者の血脈だとも。けれど、私達にはそれを信じる事は出来ない」

「証拠を見せる、とでも言うのかな？」

「いいえ、例え証を前にされても、私は貴方の行動を認められない」「ふふ、何故だろうね？」

「かつては巨大な悪だったのかもしれない。でも、今の彼女には当時のような力は無いのでしょうか？ それなのに昔がそうだったからという理由で、今のあの子を消すなんて」

「後悔先に立たずと言うたろお？ 後から大変な事となる前に、不安の芽は摘み取っておくべきなんだ」

「疑わしきは罰せずとも言いますよ。彼女に力が戻るとも限らないし、悪になるとも限らない。ここであの子の命を奪うのは、早計だと思いますが」

先までの恐怖を拭い去り、決然たる姿勢で言葉を交わす。

依然として道化面はおぞましい気配に包まれ、それを絶え間なく放出していたが、天使が臆する事はもうない。

自問自答の末に導き出した答えは、彼女の心へ並々ならぬ強健な意志力を芽生えさせていた。叩き付けられる邪気へ負けぬ程の覚悟が、眼前の猛悪に怯まぬ精神的強さを構築している。

そうした姉妹天使の心構えを、表情と態度から読み感じ入る赤の天使。

彼女のまた、似通った葛藤と結論へ至っていた。何よりも1度やると決めた事を放り出して、目的達成の為の努力もせず、逃げ帰る事が我慢ならない。生来よりの気概が、彼女に懦弱な選択を許さなかった。その結果、駄目でも何でも最後まで抵抗し続けようとい

り、無数の切片を撒き散らしながら、平面に陥没部を作る。

「あれは？」

後退する最中に天使は見た。

自分を狙い打ち下ろされた道化面の腕が、一瞬だけ巨大な鋭爪を備えた異形のソレとなる光景を。その腕が、爪が、床を抉り砕いた瞬間を。

それは有るか無いかの時間に起きた、人ならざる魔性の現出様。

道化面がやはり、姿通りの人に属する存在ではない事を示した事実。

「嬉しい事を言ってくれるじゃないかア。いいね、いいね、そー
いうの。邪魔する君達、殺しちゃオ！」

道化面が右腕を正面へ伸ばし、手袋に包まれた五指を素早く順繰りに動かしていく。

まるで彼女達が抵抗するのを期待していたかのような口調。さも愉しげに嗤う声には、舌打ちや苦味は存在しない。ただただ喜悦が滲み出るのみ。

「やはり貴方は正義の味方なんかじゃない。 邪悪なるモノよ！」

険しい表情で歡喜の仮面を睨み付ける翠の天使。

彼女は床へ降り立つと同時に右腕を伸ばし、碧の弦へ左手を掛けた。

「邪悪が世界護っていけないという、ルールはナああい。ヒヤツハ
ー！」

天使が弦を引くより早く、道化面の外套が蠢く。

内側で何かのたうつ様に覆いが揺れ、膨らみと凹みが衣の随所で起こった。かと思えば、蒼の外套が勢い良く開く。突風を受けたが如く大きく流れ、靡いた蒼套なびの下から、闇色の触手が飛び出した。「なっ!？」

天使の目が驚愕に見開かれる。

道化面の外套から溢れ出した触手は夥しい数。太さは成人男性の腕程も。透明な粘液に包まれたそれらは、ぬらぬらと濡れた不気味な光沢を放ち、激しくうねりながら翠の天使へ襲い掛かった。

視界に映った予期せぬ異形が、天使の判断を一瞬遅らせる。生じた刹那の間が、彼女の明暗を別った。

獲物を狙う空腹の肉食獣さながら、俊敏に、的確に、獰猛に、不気味な触手達は空を駆け、あれよと言う間に天使の体へ巻き付く。腕へ、手首へ、脚へ、腿へ、胴へ、触手は驚異的速度で絡み付き、弾力のある皮膚体で翠の衣の上から這い回り、天使の体を締め上げた。

「うぐ……ああ……」

抵抗する間もなく自由を奪われた翠の天使。彼女の口から零れるのは苦悶。

徐々に拘束力を強めていく触手、逃げられない現実的な圧迫感に苛まれ、軋むのは心と体。

なにより辛いのは、不快感の極みともいうべき醜悪な異形群に触れられ、あまつさえ全身に纏わりつかれているという現状。それだけで天使の端整な顔が嫌悪に歪み、清廉な魂が悲鳴を上げた。

だが無論、触手共がそんな事を気にして、彼女へ掛ける力を緩める筈もなく。寧ろ、彼女の精神的苦痛を感じ取った事で、嬉々として締め上げる力を強める程。更なる苦渋を与え、更なる苦鳴を漏ら

させんとして。

「どの道、僕の玩具を可愛がってくれた君達は、危険な存在として認知していたからねえ。帰ると言っても、後ろからバツサリ殺るつもりだったけど。ふふふフ」

外套の下から溢れ出させた触手に捕えられ、身動きも出来ずに苦しむ天使。その様子を眺めながら、道化面は悪意に染まった哄笑を木霊させる。

慈悲の心など欠片もなく、憐れみや情けは彼方に捨てた、邪念のみに特化した言葉。聞く者の絶望感を煽る独特の風調を当てた、暗色の宣告。

「お約束な展開だろお？ お粗末なのは、ご愛嬌」

尚も嗤い、翠の天使へ搔けた拘束を強める。

その言動から鑑みても、心底から今の状況を愉しんでいるのは明らか。可憐な天使が醜い触手に髑られる様へ、黒く穢れた喜びを感じているのだ。

「や、止めるおおおッ！」

全てを揺さぶる怒号を上げて、赤の天使が床上を駆ける。

憤怒の感情に双眸を染め、顔全体を烈火の如く紅潮させて、少女天使は道化面へと挑みかかった。おぞましい触手に襲われる姉妹天使を目にして、怒りの炎が爆発した事は言うまでもない。

両手に握る緋色の巨大戦斧を振り上げ、敵対者との間合いを走力で詰める。進行上に散ばる黒鎧の残骸を踏み碎き、道化面へ一気に迫った。

少女の攻撃範囲に奇抜な格好の邪悪が入る。その直後、赤の天使

は両腕を斧毎に振り下ろした。渾身の力を込めた一撃。双刃が揃って高速から宙を滑り降り、佇む諸悪へ打ち込まれる。

頑健な鎧を容易く寸断した重撃。その直撃を受け、道化面の半身が無惨に切り裂かれた。

「うっ!？」

大気に染み入る呻き。

くぐもった短声が低く漂い空気へ溶ける中、少女天使は自らの導いた結果を見て硬直した。

「な、なんで？」

怒りの形相から驚きへ代わり、次いで戦慄を浮かべる。

彼女の両腕は斧を握ったまま止まり、硬い物を打ち据えたまま動かない。

赤天使の斬撃は、道化面の半身を無惨に切り裂いた。その筈だった。少なくとも彼女は、そうなるだろうと思っていたし、それだけの力を込めて打ち込んだつもりだった。

にも関わらず。

「どうして!？」

狼狽した少女の叫びが響く。

天使の振るった2つの戦斧は、道化面が翳した左腕に激突したまま止まっていた。緋色の巨刃は天使と同じ程度の細い前腕で、1mとて皮膚を裂けず、完全に進行を阻まれている。

道化面の半身を切り裂いたというのは、天使の幻視した架空の映像に過ぎなかった。そうなって欲しいと願う、切望の感情が網膜に映した偽りの光景だった。

実際には、彼女の刃は標的へ届かず、傷付ける事すら出来ていない。

「ロリっ子にデカイ武器かぁ。萌えるね」

ピエロの仮面が奥から、調子外れの笑声が零れる。

同時、道化面が左腕を払った。たったそれだけの簡単な動作。しかしそれは得物握った少女天使を、遙か後方へと吹き飛ばす。

驚愕の表情を浮かべたまま、少女はとてつもない力に弾かれて、来た道を空中から逆進させられた。

6 筆目：苦難直面、解放への1歩を進め

目的を果たせず、狙いとは別方向に移動させられながら、それでも赤の天使は戦意を衰えさせない。

確かに初撃は防がれた。しかしだからと言って、それで諦めてしまいう程、彼女はあっさりした性格ではない。道化面への抵抗意欲を更に燃やし、表情を引き締める。

背の翼を羽ばたかせ、空中移動の途上にあつた自身の体へ制動を掛けた。その気になれば自由に空を舞う事も可能な双翼が動き、少女を押し流していた力を殺す。再び自由を得た天使は宙空で体勢を立て直し、緩やかに床へと着地。足裏が冷たい石面に触れた瞬間、両脚に力を込め、今一度、ピエロ仮面目掛けて駆け出した。

「だあああありやあああッ！」

両手の戦斧を水平に寝かせ、再度の気合いを声に乗せ、赤の天使は道化へ迫る。

散ばる鎧を踏み込めて、猛然と突っ込む天使は、短時間で標的への接近を果たし。眼前に捉えた負の集合へ左手を振るい、大斧を薙ぎ払った。

空気を裂いて風を切り、反身の緋刃が道化を襲う。だが彼の者は慌てるでもなく、悠然とさえする動作で、急接する刃の軌道上に左手を突き出した。開かれた五指、その掌へ、天使の戦斧が激突する。強大な力が弾け、凄まじい衝撃が空間へ走った。瞬間的に生じた力が空気に波紋を広げ、斧と掌の周囲に透明な烈風を迸らせる。

けれども重刃は、今回も道化面に手傷を負わず事が出来ていない。伸ばされた掌に刃を打ち込んだまま、僅かにも皮膚を傷付けられず止められていた。

「とおおおッ！」

それを気にせず、赤の天使は右腕も振るう。左手とは逆方向から大斧は薙がれ、道化の体を狙い打った。

が、やはり相手の動揺を誘う事は出来ず。今度は右手が動き、進行経路に伸び出して刃を止めた。

左右双方の攻撃を片手で、しかも素手で受け止められ、天使の顔に若干の怯みが覗く。とはいえそれも一瞬。彼女は折れぬ反意を面上に燃やし、相手の行動より速く両斧を引き戻した。同時に床を蹴り、跳ぶようにして仮面の側方へと回り込む。そこから再度左腕を振り、右肩から斜めに斬撃を見舞った。

「頑張り屋さんだねえ。イゝイ表情だ。壊し甲斐があるよ」

天使の攻勢を前に、仮面の者は余裕と共に嘲笑う。

その右手はまたしても斧を受け止め、一切の威力到達を阻害していた。少女天使の攻撃はこれまでに、どれ一つとして道化へダメージを負わせていない。先に戦った鎧達とは比べ物にならない程の實力が、高い壁となつて彼女の前へ立ちはだかつていた。

悪意の笑いを注いでくる仮面へ意識を向けたまま、赤の天使は横目で姉妹の様子を見る。

翠の天使は依然として幾本もの触手に絡め取られ、全身を締め上げられていた。彼女の顔には明確な苦痛が浮かび、体力的にも然して猶予の残されていない事が知れる。

無慈悲な拘束下にあつて悶える翠の天使へ、赤の天使が送る眼差しは辛さと悲しみに宿り。しかしそれを一拍の間を経て道化面へ移した時には、激しい怒りが爆熱の大渦となつて荒れ狂っていた。

「許さないんだから」

どんなに力を入れても押し進められない斧刃越しに、敵対者へ向け、天使は灼熱の感情を叩き付ける。

軟弱な者なら目を合わせた瞬間に失神してしまっただろう強視線を射込み、強烈な闘志を真つ向から浴びせかけて。

「僕の事が憎くて憎くて仕方ないという表情だ。ふふふ、ふふふふ」

天使の睨みに対しても、道化面は当所からの雰囲気揺るがせない。仮面の下からは、相変わらず不気味な嘲笑が吐き出される。

彼人の声が大気を掻く中、空けられていた右腕が、天使目掛けて動かされた。蒼の大衣を翻し、下方から上方へ、掬い上げるように振るわれる。

この腕運に際して、天使の反応は迅速だった。道化の腕がモーシヨンをはじめた直前に変異を察し、掴み止められていた巨斧を素早く引き戻す。そこから流れる動作でバックステップを踏み、一足跳びに距離を取った。

彼女が間合いを開けると、道化面の右腕が振るい上げられるのは同時。大きく上天を突いた右腕は、瞬間、闇の気を凝縮して異形の怪腕と化す。赤天使の立っていた箇所は負の巨爪に挟まれて、硬材が砕け、跳ね上がり、太い爪状の壊痕を刻み付けた。

「ハッハ！ 綺麗に躲すじゃないかア」

「えええええいッ！」

声調狂いの狂笑を漏らす道化。それを敢えて無視し、赤の天使は攻撃を終えたばかりの相手へ飛び掛る。

両腕を振り上げ、破壊された床を越え、一直線に標的の懐へ。勢いそのまま再接近を果たし、またも射程内へ収めると、右手に握る戦斧を躊躇無く叩き付けた。

彼女の進行速度と武器の重量が合わさった豪速の一撃。黒鎧ならば容易く破壊出来たが、道化面には例の如く通用しない。それは今回も同じで、彼女の豪打は、上げられていた相手の右手に難なく掴み取られてしまう。確かな速度を誇った斬撃は威力を発揮する事無く封じられ、天使の行動を無意味と為し。

「うーん、無駄だと判っていても頑張る健気さ。泣けてくるねえ」

ピエロの仮面が発すのは、人の神経を逆撫でする弄調の音^ね。

それでも今の少女に動じる様子はない。片方の攻め手を奪われても構わず、もう一方の左手を、そこに握った戦斧を縦へと打ち下ろした。但し、今回の狙いは道化面に非ず。右手の打ち込みを押さえ防ぐ彼人の左側面から、胴部前方へと振り下ろした一撃こそ、真打だった。

彼女の戦意を照り返すかのような緋色の刃は、道化の体から僅かに離れた空間を打ち据える。其処にあるのは虚空、空気、そして触手。そう。赤の天使は道化面を討つのではなく、姉妹天使を捕らえる触手に標的を定め直したのだ。

正確に言うなら、彼女は最初から触手をこそ狙っていた。しかし敵対者も同箇所への襲撃を予想し、迎撃準備を整えていた可能性は高い。いきなり攻め入ったとて、防がれてしまったては意味が無い。そこで天使はパターンを作った。

何度やっても防がれる事を承知の上で、相手へと攻撃を繰り返す。敵はそれを防ぐか避けるかするだろう。そして、こちらの行動は失敗に終わる。だがそれに構わず、こちらは次も同じ行動をする。敵は先の手段で相手の行動を無力化出来た事を学習している、だから似通った手段を用いてこれを防ぐ。『この行動に対して、こう対処すれば効果がある』それはパターンだ。

自らの行動をパターン化する事で、相手に次ぎ取るべき行動を刷

り込ませる。即ち、相手の行動をもパターン化する。自分と相手双方の行動を形態化すれば、微小ながら思考を傾かせる事が可能だ。パターンを繰り返す中で、不意にイレギュラーな行動へ出れば、反応は幾許かでも鈍らせる事が出来る。天使が仕組んだのはそれだった。

無論、敵勢を誘導する為の行動段階で、それが本当の狙いを隠す目的である事を知られてはならない。本当にそれしか手が無いように、そう思わせる必要性がある。だからこそ、赤の天使は全ての攻撃を本気で行った。加えて怒りの感情を雰囲気や表情、動きと全身で表現し『激情に駆られて突っ込んでいるだけ』と道化に思わせただの。冷静さを欠き、力配分も出来ず、怒りに任せて走っているだけの状態だと。

道化面に天使の状態を非健全なものへ思い込ませた要因は、彼女の演技力のみならず、幼さを残した外觀も一役買っている。若輩者であるが故、感情に流され易く、行動が単純であろうという先入観それもまた、天使の目的達成に大きく貢献していた。

心と体、二つを欺く事で、天使は当所の狙い通りに、忌まわしき醜物への攻撃を成功させる。敵対者に在る筈だった警戒心を潜り抜け、見事一手を決めたのだ。

天使の放った戦斧は闇色の群を、邪悪の徒が内側から伸び出る、その付け根近くを、豪快に叩き遣った。

けれど強靱な鋭刃の直撃を受けてさえ、触手群が切断される事は無い。弾力ある肉感的な管達は斧を受け止め、これに抑え付けられながら下方部へ沈下。断裂という結果は招かず、俄かに撓むのみ。

漸く手に入れた反撃の糸口は、結局、大きな戦果を上げる事無くこの事実を目の当たりにした少女天使の面貌へ、本心からの落胆が切なさと共に滲む。

……ことは無かった。

それは充分過ぎる成果。触手の動きを両瞳の映す赤の天使は、反射的に口唇を吊り上げ笑みを作る。

全ては瞬きの間に起こった出来事。

赤天使の斧撃が触手へ命中しこれを撓たわめた時、翠の天使を縛り上げる触手群は、彼女へ対する拘束力を多少ながら緩めていた。

それは奇跡の様な一瞬。千載一遇たる起死回生の好機。言うなれば、海の中へと沈み込み呼吸が出来ず苦しんでいる者が、突然に海面へと顔を出し、欲して止まない空気を吸えた瞬間と同じ。

翠の天使を苦しめていた触手の圧力が、突如として軽減されたのだ。それは時間に換算してあまりに短い仄かなる一時にすぎず。されど苦しみから解放された彼女の意識は、この刹那の間に、形勢を一転する為の行動を組み上げた。

それは思考というプロセスを踏まず、本能の閃きに準じた働きだったのかもしれない。死をまじかに控え、終わりという名の冷たい御手で撫でられた者だけが感じる、命の危機。それへ接した事によって研ぎ澄まされた生存本能が、生命活動の維持継続へ向けて全てを動かしたのか。

彼女自身にさえ、それを知る術は無い。だがそんな物は現状に於いて、然したる問題でなし。

脳内で輝きを発した行動計画は、稲妻の速度で肉体にこれを実行させた。

緩んだ拘束の下、微細な自由を手に入れた四肢。翠の天使は考えるよりも先に右腕を動かし、左腕を動かし、指を動かし、瞳で照準を合わせ、息する間に光矢を放つ。

神業的速度で行われた超速度の射撃は、翠の光で構成された眩い矢を世界へ顕現させ、彼女を包む望まぬ覆いを撃ち抜いた。翠の矢が天使の腕と腰へ巻き付く触手を食い破り、更に進行経路上に連なる触手群の束根を貫通。闇色に蠢くそれらは中途から焼き切られ、千切れ飛び、肉柔壁を上下へ弾ませ、吹き散らされる。

これによつて彼女を捕らえる触手は大幅に力を失つた。かなりの自由が天使へ戻り、それは次なる反撃の狼煙のろしと化す。翠の天使は2撃、3撃と続け様に矢を射放ち、周囲に纏わり付く触手と、その束根を相次いで突き崩した。

こつなつてはもう、異形の醜管群に天使を封じ続ける力は無い。幾多の長物が撃ち切られ、床へ落ち、青黒い炎を上げて燃え始める。猛烈な異臭を発して燃える触手の残骸は、次にはもう灰すら残さず消えていた。

粘つく忌まわしき拘束を断つた天使は、大きく飛び退いて床面へと降り立った。

翠の衣の足まで達す裾を靡なびかせ。ただ静かに、されど厳然として、故に美しく。細く色白い両脚が、硬き床を踏んだ。

天使の肩は忙しく上下に動いている。苦痛から解放されたばかりで、呼吸は荒げられていた。そんな彼女の顔には、自由を得た喜びよりも、死を免れた安堵よりも、自らを救う為に奮戦した赤の天使へ対す、直向きな感謝が浮かぶ。両の碧眼に宿る謝辞の念は、幾らかの距離を置いて立つ姉妹天使に注がれた。

これに気付く赤の天使は相手の脱出成功へ嬉々としながら、抵抗力の耐えた触手より斧を離し、続け様に横へと薙ぎ払う。緋の一閃が道化面の外套を末端だけ斬り裂き、破れた布地を宙へ飛ばした。

青の炎に包まれ、一瞬で消えてしまうそれを横目に、少女天使は床を蹴つて一気に後退。翠天使の横方へ並んだ。

「有り難う」

赤の天使へ向けて、翠の天使は頭を下げる。

短いが、だからこそ数多の想いが込められた言葉。これを聞いた少女天使は、微かに頬を染めてはにかんだ。

「うっん、そんなのいいの。お互いを助け合うのは当たり前だよ」

緩く頭を振って微笑みかける。赤の天使のその仕草は、翠天使の顔にも同様の微笑を刷^はかせた。

2人は見詰め合い、そして頷き合う。同じ主よって創られた姉妹天使に、多くの言葉は不要だった。両者は以心伝心の間柄。互いの心を、想いを、自分の事の様に理解出来る。まるで双方が共に半身同士であるかの如く。

感謝も、安堵も、喜びも、怒りも、悲しみも、2人は常に分かち合ってきた。その胸中は、言わずとも充分に伝わっている。だからこそ両者の決意も同じに堅固。今再び揃い立った天使達は、等しく強健な意志を交差させた。目的意識はただ一つ。正面に佇む悪意への、叛意は強く。

「あいつをやっつけて、絶ええっ対に望^{ハッピーエンド}まれた終わり方を作るうね！」

「ええ、勿論よ。2人で一緒に、勝ちましょう」

赤の天使は戦斧を構え、翠の天使は矢を番^{つが}える。

2人は同時に道化を睨み、戦闘体勢を整え直した。両者に宿^{てき}る敵愾^{がいしん}心は、先よりも熱く激しい。相對する邪悪へ注ぐ視線は鋭く重い。翠の天使の呼吸も段々と落ち着きを取り戻しつつある。彼女の状態が持ち直されれば、それが戦闘再開の合図となるだろう。その刻は近い。

「やれやれ、酷い事をしてくれた。内臓を引き裂かれた気分だよオ」

天使達に正対する道化面は、蒼の外套を振るって嗤^{わら}う。

外套の下から覗くのは黒い着衣。そして青い炎に焼かれ、消え散る触手。蒼套の下から溢れ出ていた醜悪な異形群は、今全てが塵さ

え残さず消滅していた。

翠の天使に射抜かれ、大半が欠損した為に。もう殆ど使い物ならなくなつたそれを、道化自身が抹消したのだ。触手群は元々肉体の一部ではなく、仮面の者が有す闇の気が、死の波動が、無数に集約し生まれた擬似的な部位にすぎない。

ただ肉体の延長上に作られ、本人とも強く結び付いているので、損傷と喪失には彼人の言葉通り、かなりの痛みを伴つたが。

「それに、上手いこと謀^{たは}つてもくれた。ふふふ、嬉しくなるね」

少なからざる痛みに晒されながら、それでも道化から漏れ出るのは愉しげな声。

尤も、声調が一定でないので実際にどのような感情が宿されているかは判然としないが。

笑みで固まつたピエロの仮面は、麗しき天使達を見据えている。その奥にある瞳もまた、彼女達を捉えていた。

全身から放たれる負の統念は濃度を増し、不浄の存在を更に恐ろしやかなモノへ感じさせる。だが、既に覚悟を決め、勝利を誓つた天使達は動じない。臆さない。怯まない。抗う意識は清浄の気迫を天使達に与え、近づく闇を振り払っていた。

2人の天使と道化面は、真逆の立場から正対する。相反する両勢の、目先が目的だけは同一。敵対者の撃破。これ一つ。

7 筆目：狂的恐怖、悪意の仮面

膨張の一途を辿る互いの敵意。限界まで研ぎ澄まされる緊張感。
高まる鼓動、深まる昏怨^{くえん}。

永遠の様にも思える、一瞬の睨み合い。

「行きます」

澄んだ声音が大気を震わす。翠の天使が告げた一言。

引き絞られた闘争の堰^{せき}を突き崩し、それが再戦の合図となった。

翠の天使が光矢を射放つ。輝く眩矢は一直線に空間を走り、標的たる道化へ突っ込んだ。対する相手は何する出なく佇んでいる。その正面に向かい来た翠。乗っているのは直撃コース。しかし道化は動かない。動く意思すら覗かせない。

「いける？ ……いいえ」

敵勢の様子に不審なものを感じながら、目に映る状況に可能性を見出し。けれど翠の天使は即座にそれを否定する。

この程度でどうこう出来る手合いで無い事は、身を以って理解しているが故。そんな彼女の思考は極めて正しい。

迫る光が道化の眼前へ至った時、矢の進行は急に止まった。後僅かで仮面の眉間を射抜くという近くまで接近していながら、光の矢は青黒い炎に巻かれて霧消する。

それは道化面から生えていた触手を焼き払った、あの炎だった。

「無一駄だあよ」

道化は嗤^{わら}う。変わらぬ語調で。数多の感情を入れ混じた、規格外

な抑揚の声で。

だが翠の天使は平静さを崩さない。自らの放った矢が顛末を見届けて僅かに目を見開いたが、それも一瞬で元に戻し相手を睨み直す。続けて左手を動かし、碧の弦を引いて矢を番え。新たに作った3本を息つく間もなく斉射。

弓より飛び出す3本はそれぞれ異なる軌道を取り、別方向から道化へ襲い掛かった。矢の1本は上空から放物線を描いて降下。光の1本は横合いへ回り込み弧状に旋回して接近。翠の1本は相手を通り越して流れ行き、そこから反転して外套の背後より。

独自に意思があるかのような自由な移動を遂げて、方々から同時に、矢達は邪悪へ向かい飛ぶ。しかして道化は呆けの所作を乱さず、3光の急追を甘んじて受け入れた。

飛来する翠は彼人のまじかまで寄るものの、その身へ接する前に炎を纏い。青と黒の猛火に塗れ、瞬時に立ち消えてしまう。微かな残り火さえ後には散らせず、炎諸共、無空に果てた。上方、側面、後背、3点から攻め入った翠の光は全てが同時に。

道化面への攻撃は悉くが失敗に終わる。見えざる力が魔性の障壁となつているかの如く、全ての攻撃を防ぎ、無力と為した為。その正体は未だ知れない。天使達に馴染みの無い暗色の波長なのか。それを探りながら、攻略法を求めながら、赤と翠の天使は戦った。姿なき不浄の力によつてとてつもない耐久力を誇る闇の道化に、通じないと知れた攻撃を何度と無く繰り返し。その過程で好機を望み、運命の転換点を欲し、果敢に挑み続ける。

彼女達に諦めの色はない。怯えも、焦りも、敗北の予感すら抱いてはいなかった。盲目的に勝利を信じて、一手一手に全てを注ぎ、天使達は道化と対峙している。

「てりやあああッ！」

翠の天使が矢を放った時、同じタイミングで赤の天使も駆け出していた。

彼女は両脚で床を蹴り、2本の大斧を構えて、何度目かになる突撃を敢行する。光矢の接近さえ許した敵対者は、少女天使の猛勢にも無頓着な風。身を揺らさず、茫洋と直立して、彼女の攻め手を正面から迎え入れた。

「はぁあッ!」

豪快な気合いと共に少女の腕が動き、右腕が戦斧を伴って振り下ろされる。

仮面を脳天から断とうという必殺の気迫が滲む一撃だ。応じた道化面の反応は、左手を動かして頭上に掲げるのみ。それで充分だった。

仮面の者が繰り出した手が、少女の巨斧を容易く掴む。けして遅くはない斬撃を。けして弱くはない攻撃を。いとも簡単に受け止め、自分への直撃を防ぎやった。

一方で、相手の防御行動を目の当たりにしてきた天使は、表情を小揺るぎもさせない。代わりに取った働きは、それまでとは異なるもの。

左手に握っていた緋色の戦斧が、赤熱する炎と化して消えた。現れた時とは真逆、斧は炎へ変じ、天使の手中から消滅する。一転、彼女の左足に焰が宿った。足首より下全体へ赤の光が被さり、少女の足を赤熱に輝かせる。

「くつらええええいッ!」

赤の天使が吐き出すのは噴気の怒号。

右脚が強く床を踏み締め、全身支える柱となり。少女は高らかに左脚を振り上げ、軸脚を基点として上体を捻転。空中へ舞い出た脚

部が、炎を抱く御足が、大気を焼き刈り道化の頭部を狙う。

猛烈な速度で直走る蹴撃。そこに込められた力は斧の振り抜きに勝るとも劣らない。加えて燃え立つ炎の存在。仮にこれを素手で防いだとしても、灼熱の業火が敵を焼くは必至。

「ウホツ！ いい蹴りだ」

感嘆と嘲弄を込め、道化面が評す。

余裕の発言を口にしつつ、彼は滑らかに腰を引いた。無駄な動作の一切ない、簡潔にして完成された動き。必要最低限の僅かな動作で、仮面に覆われた頭部が後方へ。襲う少女の脚はピエロの鼻先すれすれを横切り、手応えを得られぬままに攻撃過点を通り過ぎた。

道化の顔面を捉えられぬまま走りきった左脚は、衰えぬ速度を維持して半円の航跡を取って床に付く。その時にはもう、宿っていた炎は消えていた。

赤の天使が双眸に、鋭光えいこういつせん一閃。脚を地に踏ませた直後、天使は左拳を握り固め、腰溜めに引き構える。次いで全身を反転させつつ、更に腰部のバネを用いて上体を捻り。これを解き放ち、戻る反動から拳を正面へ突き出した。

「ちええええいッ！」

少女らしい声に合わせ、少女らしからぬ豪速の拳打が宙を疾はしる。

素早く繰り出された左拳には、足から移動した炎が灯り、熱く瞬きを放っていた。炎を乗せた拳が、天使の正拳突きが、真正面から遂に、道化面の腹部を打つ。

天使は細腕、なれど侮る無かれ。彼女の腕は、巨大な戦斧を片手で軽々と振り回すのだ。重さを感じさぬ軽快な動きで、緋色の刃を自在に操る。それが拳を作り、熱化の炎を伴って、外套の下にある黒の着衣へ、道化の腹へ、的確に命中した。

だが、そこで終わらない。拳が不遜な邪悪の胴体へ減り込んだ瞬間、天使の炎が爆裂。赤の熱波が爆ぜ飛び、炎は球状に膨らんで四散。圧倒的な熱量を中心点に掛け、無数の火の粉を舞わせる。半瞬遅れてから爆音が轟き、天使の髪と道化の外套を各々外方へ靡かせた。

「キくねえ〜。厚こい肉のパン挟み、4個分ぐらいかな？」

声調に変化ない、道化面の語り。

少女天使の目の前で、腹に拳打と爆発を受けた仮面の徒が、愉しげに笑声を漏らす。

完璧に入った筈の攻撃。確かな手応えもあった。なのに相手へは、堪えた様子がない。これにはさしもの天使も顔へ困惑を刷く。

その変化に構わず、道化面の右腕が突き出される。五指を揃えた貫き手。狙うのは自分と同じ腹でなく、少女天使の頭。彼女の顔を中心から抉らんとするように、至近距離から刺突を放った。

驚いている暇はない。赤の天使は殆ど反射的に首を捻り、全身を曲げ、突き込まれた敵者の一撃、その射線上から頭部を逸らす。僅差を経て、彼女の顔面側方を猛然たる黒手が駆け抜けた。回避と同時に強烈な突風が顔に当たり、それだけで天使に痛みを感じさす。が、それに続いて少女の左頬へ、五つの爪痕が刻まれた。

避けきつて尚、逃げられぬ腕撃の残滓。瞬間的に異形の腕と化した道化面のそれが、彼女の頬を切り裂いて、白い肌へ血を伝わらせる。

「僕の攻撃をこんなに躲せるなんて、嬉しくなるなあ〜」

相変わらず嗤いながら、道化面は突き出した右腕を振るう。

垂直に伸ばされた腕を、今度は真横へ、少女天使目掛けて横に払った。

「ッ!？」

最早、目で追える速度ではない。

直感に従って、本能の警鐘に倣って、赤の天使は腰を落とし、頭を下げる。

そして間一髪、頭上を横薙ぎに払い抜けた魔性の怪腕を遣り過ぐす事に成功した。

けれど彼女の胸中へ去来するのは、安価な安心感などではない。寧ろ絶対的な危機感。全身が戦慄^{つなな}き、心臓が早鐘を打つ。自らの置かれた状況の致命的なまでに救い難い旨を、筋肉が、細胞が、血液が、只管に連呼していた。

「僕は嬉しくなると、つい殺っちゃうんだ」

軽妙な嗤^{わら}いが、少女の鼓膜を舐める。

背筋に走る怖気を天使が実感するよりも速く、道化面の右膝が彼女の鳩尾^{みぞおち}を抉った。

「かハッ……」

痛烈な衝撃が、赤の天使を襲う。

一瞬だが呼吸は止まり、内臓が拉^ひげられる程の圧迫感を覚えた。四肢は硬直し、全感覚が遠退く。思考が止まり、視界は白み果てた。右手に握った斧は、炎へ戻り消える。

折り曲げられた道化の膝。それは彼人の右腕を躲す為^{ため}に身を低め、動き辛い体勢を自ら作ってしまった天使の急所点へ、正確無比に深々と減り込んでいる。正に、先刻の拳が礼だと言わんばかり。その威力は細身なれど人1人の身を宙空に押し上げ、腰を強制的に動かす、全身を『く』の字に折り曲げさせる程。

「う……っ」

腹部に留まり暴れ回る激痛に晒され、天使が意識を引き戻す。

未だ判然としない意識の中で、胃を逆流し、食道を駆け上る液の奔流のみは強く感じられた。猛烈な嘔吐感に顔をしか顰め、耐える事も出来ず登り詰めた衝動を解放しようとした時。

「これか？ これか？ こっちの方がイイかな？」

道化面の左腕が振り上げられ、少女へと勢い良く叩き落される。

異形の腕へ変じ、凶爪を光らせる五指が、赤天使の半身を引き裂いた。

長く鋭い爪は右肩から皮膚を断ち、脇腹を経て、腰に裂傷を生む。天使の着込む紫の肌着が部分的に破れ飛び、幾許かの素肌を鮮血と共に覗かせた。

更なる膨痛が少女の頭を焼き、衝撃は嗚咽を漏らさせる代わりに、喉まで押し迫っていた胃液の波を引き戻させる。声にならない叫びを飲み、天使の両目は限界まで開かれた。そこへ映るのは苦痛一色。それ以外の感情を読み取る事は出来ない。

「ハッハッハッハッハ！ ああいむ、らぶりい」

場違いな明笑を木霊させ、道化の右腕が再度の動きを見せる。

全ての指が等間隔に開かれ、内側へ曲げられ、掻き裂く形を作った。そしてまた横方より、少女を狙って振り払われる。動き出した腕は闇の覆いによって、恐ろしい形状を構成。空気を破る獰猛な一手を走らせた。

「させないッ！」

瞬くような僅かな時間に繰り広げられた赤の天使と道化面の攻防。それを離れた位置から見ていた翠の天使が、悲鳴に近い声を上げる。天使の握る碧緑の大弓が彼女の意志に呼応して、当所と同じ一条の翠光となった。それは瞬時に長く伸び、弾性を備えて細く波打つ。彼女はそれを右手に握り、力任せに道化へ投げた。

天使から放られた翠の光は目にも止まらぬ速さで進み、更に全長を増し、目標たる仮面の者へ辿り着くと、彼人の右腕に絡み付く。前腕へ幾重にも巻き付いて、赤の天使を襲おうとしていう動きを止めた。

光は、翠に輝く鎖となつている。弓が形を変えたのは鎖。長大な、翠光の鎖だ。天使はそれを右手に押さえ取り、左手で伸び立つ面を掴んで引き寄せる。しかし道化面は動かない。ただ鎖に囚われた右腕の進行を抑えられ、それ以上は押しも引きもせず。敵勢に対して翠の天使が出来たのは、そこまでだった。

「それで、どうするのかなあ？」

自分の腕に巻き付いた鎖を眺め、次に翠の天使へ視線を転じ、道化面が問う。

陰惨な含み笑いを忍ばせた声に、しかし天使は微笑を返した。

「こつするんです」

鎖で引く天使の一言。

それが空気へ溶け込んだ直後、赤の天使が瞳へ叛逆の激火が迸る。翠の天使が作った短い間は、それでも姉妹天使の活力を取り戻すには十分な時間だった。1度は道化面の猛攻によって我を忘れるまでに追い詰められた彼女だったが、固めた決意と覚悟は伊達でない。消えた意識を取り戻し、激痛に耐え抜いて、強靭な精神力を奮い戦

意を再度煌かせる。

「おやあ？」

近郊で起こった鬨気の再燃に、仮面が視線を向ける。

同時、全身を襲う痛覚を意志力で抑え込み、赤の天使は2度目の蹴撃を繰り出していた。またしても右脚を基軸とした、上半身を捻りながらの上段回し蹴り。先と全く同じ形。全く同じ速度。全く同じ狙い。手傷を負っている分、先刻より全てが劣っていて不思議のないそれを、少女は一切の遜色なくやつてのけた。

しかも以前と違い、左足に纏まとわされた炎は更に大激。戦斧二つ分の炎が宿っている。

「のおおおりやあああッ！」

遙かに熱い憤怒の攻撃。吐き出される剛毅の濃さに、道化面は回避行動を狙う。

だが翠の天使が全力で鎖を引き、右腕が僅かに前方へ動いた。腕は付け根から肩へ、そして全身へ引力を運び、不浄の仮面が行動を1秒分阻害する。

生まれた機会は天使達の求めるものだ。赤の天使が左脚は、回避の遅れた道化の仮面を打ち据える。炎に包まれた足が仮面の中心へ直撃し、強大な圧力を解放。止め処ない破壊の力が万遍に伝わり、続いて炎が起因する爆発が起こった。渾身の一撃。

頭部に受けた衝撃は逃げ場なく全体を染め、道化面の首を後方へ流す。今回ばかりは不敵な仮面者も上体を仰け反らせ、抗えぬままに1歩を退いた。

「よっしー！」

少女天使の顔に、確信の笑みが浮かぶ。

痛みは依然として神経を蝕むが、それを上回る達成感が痛覚を飽和状態に感じさせた。

それでも油断は出来ない。相手は垣根なしの化け物なのだ。些細な気の抜きようが、生死を別つ敗因を生みかねない。そして彼女の予想は、最悪の事実として動き始める。

「これは、くッ！」

翠の天使が驚愕の表情を作り、その体が床から離れた。

彼女は宙を大きく飛び、赤の天使と道化面の頭上を流される。

天使の蹴脚をまともに受けてよろめいた仮面者が、右腕を大きく振るい、鎖毎に天使を投げ飛ばしていた。翠の天使は道化面の異常な膂力に引き摺られ、空中を行く。されど、やられるままではない。虚空へ投げやられた所で翠の鎖を光へ戻し、敵対者の操作力から自らを離れた。その後、光を再び弓に変え、空を滑りながら矢を射放つ。

3本の光矢を相次いで撃つと、空中だろうが関係なしに体勢を整え、静かに、そして緩やかに、道化等の後方床へ華麗に着地。投げ飛ばされた際の衝撃等は皆無である。

赤の天使がそうしたように、翠の天使も空中での移動行は不得手でない。彼女等の翼は飾りではなく、機能する有能な部位なのだ。

「ふふふ、ふふふふふフ、今回は、1番キいたねえ〜」

不気味な嗤い^{わら}を上げ、振り返らせていた体を戻す道化面。同時に伸ばされる左腕。

それは行動直後の赤天使へ迫り、全身を焼く苦痛によって若干動きが鈍っていた少女の首を捉えた。

「うぁッ!？」

反応速度を超えた邪悪の腕は、五指を以って天使の首を掴む。彼女の口から苦しげな呻きが漏れる最中、仮面者へ翠の光矢が降り注いだ。けれど全ては青黒い炎に焼かれて消えてしまう。道化面の護りは、未だ失われていない。

「素晴らしいコンビネーションだあ。僕も思わず、弟を思い出してしまったよオ」

赤天使の首を締め上げ、少女の体を徐々に床から遠ざける。

道化は左腕一本で天使を掴み上げ、自分の目線以上の位置にて彼女を止めた。

その顔に付けられていた仮面は、左半分が罅割れ、右半分が完全に碎けている。壊れた仮面の下から覗く赤い髪と、凧いだ湖面の如く感情のない緑の瞳。そして目の下に描かれた、涙のようなペイント。そこには道化面の素顔があった。口の端が吊り上り、狂的な笑みの浮かべられている顔が。

「う、ふうう……あ、はッ」

「お陰で、僕のトレードマークが台無しだ」

尚も首を締め上げられ、赤の天使は激しく悶えながら両脚をばたつかせる。

そんな彼女には構わず、道化面はクツクツと嗤い^{わら}続けていた。仮面が壊れている以外、何の傷も存在しない顔で。

彼等の背方に立つ翠の天使は、厳しい目で敵対者を睨む。敵意^{みなぎ}漲る視線を射込みながら、手にする弓を限界まで引いて矢を向けた。触手に絡め取られていた時は立場が逆転している。今度は彼女が、姉妹天使を助けねばならない位置関係。

「ふふふふふ、ははははははは八」

寒々しい広い空間に、緊張感と濃厚な死臭漂う世界に、音程狂いの不気味な哄笑が響き渡る。

旗色悪い天使達に、その声は耐え難い悪寒を走らせた。

8 筆目：天下大咆、もちろんさあ

赤天使の首を絞め、その体を左腕だけで持ち上げながら、道化面はゆっくりと振り返った。

喉元を押さえ付けられ、満足に呼吸も出来ない少女を揺らし。蒼の外套ひろがえ翻して踵を返す邪悪の視界に、翠の天使が映り込む。

「ふふふ、その弓で僕を射つつもりなら、遠慮なくどうぞ」

翠の矢を挟み、その射線上で鋭い目に射られつつ、それでも尚、道化の口は笑みに歪む。

吐き出される言葉は愉快さを隠さない。

相手の狙いは明らか。捕えた天使をぶら下げて、これみよがしに晒しているのだ。誘っているとしたか思えない。

「僕も今回ばかりは無防備にはろう。盾もある事だしね」

底暗い悪意を横たえ、含み笑いを溢す。

仮面の下から覗く素顔、そこで輝く緑瞳に感情の色はなく。ただ口唇のみが陰惨に吊り上げられ、相對する天使へと挑戦的な醜笑を注いでいた。

翠の天使は光矢を道化へ定めたまま動かない。普段は穏やかなその顔も、今は真剣味に染まる。姉妹の首を絞め、それを誇示するように突きつけられているのだ。平静でいられる筈もなく、天使自身無意識のうちに、変色する程に強く唇を噛み締めていた。

「僕は逃げも隠れも、避けも防ぎもしない。さあ、思う存分、射つてくるとイイ。彼女に当たっても構わないなら、だけどねえ。ふふふふ」

口は笑み、声も笑むが、眼は笑っていない。

ドス黒い害意に濁る瞳。それは凡そ人らしからぬ明状を湛え、翠の天使を貫いていた。抵抗を反撃を、心から望むように。相手の反抗心が強ければ強い程、それだけ痛めつけるのが楽しいという、昏い愉悦に胸躍らせて。

一方、翠の天使は敵勢を睨みつけたまま無言を通す。口は強く引き結び、剣呑な目付きで饒舌なる道化を注視。敵然たる敵意を全身から放射して、憎き相手へ叩き付け。

「速く何がしかのアクションを起こさないと、マズインじゃないかなあ。このままだとこの子、呼吸困難で死んじゃうよお？ ああ、それとも……」

空中で両者が視線を交える最中、赤天使の首を掴む道化面の手へ、今以上の力が入る。

それと共に、少女の首が更なる握力によって押し狭められた。咽い喉部のどぶちに噛み付く5本の指が、限界近くまで皮膚を圧迫。血管を半分近く塞ぎ、骨までが軋み出す。あまりの力と苦しみは、彼女の口から呻とも嗚咽ともつかない声を漏れ出させた。

「えがや……ア、ヴえ……イぎ……」

それは殆ど本人の意思とは無関係に吐き出される音。

外からの圧力によって潰されつつある喉が、押し出される酸素を通して鳴っているだけ。強引に震われる声帯が、声の形に近い音を発しさせているに過ぎない。

そんな意味のない音を絞り出すばかりの少女天使は、既に顔面が蒼白。両眼共に白目を剥き、鼻孔からは鼻水を、だらしなく開かれた口から涎を垂れ流している。元が可憐であるが為に、歪められた

顔のなんと凄惨悲愴な事か。

「腕に力を入れて、この子の首をブツチンしちゃうお？ 首と胴体が離れても、生きられるのか試してみようか。ねえ、天使ちゃアアアアン」

緑の瞳を見開いて、盛大に口唇を裂く道化面。

その口から赤い舌を出し、唇をゆっくりと舐める。唾液で濡れた舌が這った後、その唇は粘性の光沢を放った。

相変わらず感情というものが見られない瞳。だが面上に浮かぶ狂気と悪意は、十分に常軌を逸している。全身から滴るように零れる死臭も、常識の範疇に括れるものではない。姿形のみが人型なれど、最早その何処にも人らしい色を探す事は不可能だった。

「貴方のように醜い心を持つ者を、主様が創ったとは思えない。きつと何かの間違いで現れてしまったのね。それ以外には、考えられないわ」

獐猛に嗤う敵対者を睨み見ながら、翠の天使は口を開く。

沈着にして安定した声。低く、静かに、冷たく、澄んだ音色。彼女の語調はとても平坦で無感動。まるで零下の水原が如く、凍て付いて丸味がない。声そのものが、相手を切り裂く鋭刃を思わせる程に。

即ち、それは彼女の怒りが臨界を超過した事を意味する。生来より穏やかな気質の彼女は、怒りの度合いが増す毎に冷静となり、冷淡となり、冷血とさえ言えるまで、感情の温度を落とすタイプだった。

目の前で姉妹天使が苦しめられている様を見せ付けられている今、彼女の思考は極限までクリアとなり、心は絶対零度の領域にある。

それこそ、今のままなら赤の天使が後どれ程で呼吸を停止するか。

或いは道化面が彼女の首へ更なる力を掛けたとして、基本耐久力と現在の状態から鑑み、どこで限界を迎えるか。どれだけの余裕があるか。その中で自分がどれだけ動けるか。果てはそのシミュレーションまで脳内にて組み上げる。

翠の天使は冷静だった。冷酷なまでに落ち着いていた。この状況で最も有用な戦略を練り上げる姿は、冷厳と断じれる程。

「それはもう、いい事です。どの道、貴方を倒さねば私達に先はないのだから。貴方が何者であれ、今はもう気にしません。私はただ、約束を守るだけ」

「んん？」

冷気を帯び、厳冬の夜更け並に静かな声で、天使は語る。

それに笑みを浮かべたまま、首を傾げるのは黒色道化。されど、彼人の手が獲物へ注ぐ力は揺るがない。

その在り様を真っ直ぐに見詰めたまま、碧の天使は両瞳を鋭く光らせた。

「その子と約束したのよ。2人で戦いに勝って、ハッピーエンド望まれた終わり方にしようって！」

低く叫んだ瞬間、天使は番える矢を放つ。

翼を模した大弓から撃ち出された翠光の矢は、寸分変わらず直進し、吊るされる赤の天使を貫いた。

彼女の着衣を抜け、体を穿ち、背まで押し通り、続けて、それを握る道化面の胸へと突き刺さる。

翠の天使は止まらない。更に碧弦を引き、連続して光矢を撃ち遣った。天使の左手が弦を震わし、それによって矢を生み出し、輝くままにすかさず射出す。飛び行く矢は次々と赤の天使を射止め、その後背へ立つ邪悪へ命中した。

先だつて彼奴が告げた言葉は真実であると、現在進行形で証明されている。道化は自らの発言通り、逃げも隠れも避けも防ぎもしない。確かに無防備で、飛来する矢を体に受け続けた。

尤も、それは彼人に残る最後の良心が、フェアプレー精神から約束を全うしたという事ではない。単純に油断した為だ。

この邪悪者も翠の天使が放つ矢に、強力な貫徹力がある事は知っている。闇色の触手群を打ち破った折、彼女の矢がそのような働きをしていた事を見ている為。故に今回も、矢が赤の天使を射れば容易く突き抜け、自分の身を撃つと理解はしていた。だが、それをしていないのだ。

これもまた油断。そして思い上がり。

道化面は高をくくっていた。翠の天使は、赤の天使を撃つ事など出来ない。

今までの彼女等がやりとりを見ていて、余人の立ち入る隙の無い密接な信頼関係から、互いが互いをどれだけ大切に想い、理解し合っているかは読んでいる。だからこそ少女天使を人質に取った今、翠天使に自分を射る事は出来ない、そう決め付けていた。

例え撃つたとして、それは先刻に見せた変則的軌道で迫る矢になるのだらうと。これへの対処として、自分の背後や側面には件の黒炎生み出す結界を張り巡らせてある。もしも光矢が軌道を曲げて変幻自在に襲い掛かってきたとしても、全てを迎撃出来るように。

ただ1つ、この考えから正面のみを除いて。

そんな道化面にとつて、これは全く予想外な展開である。油断と慢心、そして翠の天使が抱く覚悟と決意の読み間違い、これらが合わさり彼の想像とは異なる結果を導き出した。

「くく、焼けるねエ」

顔には笑み。だが体からは煙が上がる。

道化の体へ突き刺さった数本の光矢は、彼人の身を貫通しないで
抉り留まっていた。その矢は外套の下にある黒色の着衣を破り、皮
膚を裂いて体内深くへと沈み込んでいる。そして接触面全てを浄化
の光で焼き、不浄なる体軀を徐々に崩壊させつつあった。

これによつて、道化面の意識は反射的に自らの体へと向けられる。
久方ぶりに起こった、我が身へ掛かる異変に。

そうなり初めて、少女天使の首を絞め続ける手から力が抜けた。
本人もまったく意識しない間にだ。

常時掛けられていた圧力が薄れ、赤の天使へと解放の刻が訪れる。

「つこの！ クソ野郎オオオオツ！」

咆哮。

道化の腕が力を落とした直後、意識を覚醒させた赤の天使は、周
辺の大气を揺り動かす雄叫びを上げる。

それと同時に右手へ炎を爆発させ、瞬時に緋の戦斧を実体化。す
るやいなや素早く、雄々しく、荒々しく、腕を振り上げた。燃える
大刃は目にも止まらぬ疾さで上方へ駆け抜け、自らを捕らえる猛悪
の左腕を、前腕の程から切断する。

幾つもの火の粉が軌跡をなぞる中、赤の天使は拘束を脱し自由を
得た。

「よつくもツ！」

空中で手に入れた行動権を、彼女は即座に利用。

背中の双翼を動かし、床から浮き上がった状態で豪快にバク転。
左足の爪先に炎を宿し、体の回転運動に乗せて道化の顎面を蹴打す
る。

強速度で放たれた一撃は完璧に標点を捉え、敵対者の顔を一気に
上向かせた。回避も防御も許さない迅速のサマーソルトキック。こ

の時、爪先に灯る炎が激しく爆発し、第2の衝撃を生み出す。物理的攻撃と爆熱の連撃は、道化面の頭部を赤と黒の煙で覆った。

「やってくれたなアアアッ！」

これを為した少女は足から軽やかに床面へ降り立ち、続け様、右手に握る大斧の斧頭を、全力で突き出す。

切断面ではないも、極めて硬い斧の頭が敵勢の腹部を打った。その破壊力は凡百の人間なら臓器を圧し、アバラ諸共脊髄を粉碎、2度と立ち上がれぬ程の甚大なダメージを負わせるまでに巨大。

その直撃を無防備のまま受けた道化は、今までのように余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）とはしていない。反して、足裏を床面に擦りつけながら大きく後方へ滑っていく。

強烈な勢いに負け後退させられた道化の前方で、斬り飛ばされた左腕が床へ落下。黒鎧が散乱する其処へ、鈍い音を立てて打ち付けられた。

「大丈夫？」

一瞬での3連撃を終え、数度のバックステップで自分の隣まで跳び退がってきた赤の天使に、翠の天使が問い掛ける。

氷点下まで下った感情は既に融解されており、常の温かさを感じられた。その顔には安堵と喜び、そして気遣いの色を浮かべ。

「うん、なんとか平気」

これを受けた赤の天使は、左手で喉を擦りながら、それでも笑顔を向け返す。

右手の甲で顔を汚している鼻水や涎を拭い、白い歯を覗かせた。その体は無傷。矢で射抜かれた後は無い。

「えへへ、今度は私が助けられちゃったね」
「助けるのは当然です。うふふ」

並び立つ天使は、お互いの顔を見詰めて微笑する。

赤天使の笑顔は、翠の天使なら自分を傷付けず助けてくれると信じていたから。翠天使の笑顔は、赤の天使なら与えたチャンスを必ず掴んで苦難を脱すると足掛かりにすると信じていたから。両者の笑みは互いを信じ合い、互いがその信頼に応えた結果として作られている。

そこへ見える感情は、それぞれを強く想えるからこそ生まれるものだ。昨日今日知り合った他人に対して、浮かべられる色ではない。2人の距離感だからこそ見る事の出来る心彩である。

「あゝれえゝ、オカシいなあ。どーして僕にだけ、矢が刺さってるのかな？」

赤の天使が反撃によって、顔を爆発させられ、腕を落とされた道化面。

それが疑問の声を上げながら、天使達を見据えている。

胴体には未だに幾本の光矢を刺したまま。切断された腕の傷口からは赤でなく、墨の様に黒い血を滴らせ。蹴り上げられた顔は顎に煤を付け、残っていた仮面の半分を床へ落とす。

完全に覆いを失い露になった顔の左半分は、赤い髪が垂れ下がる。それによってやはり隠されており、素顔の全てを確認する事は出来ない。

そんな道化面の顔には、今も変わらず笑みが浮かべられていた。緑の右目は感情色を一切映さないまま、口は半月状に歪められ、異常さの際立つ狂気的笑みを満面に刻む。

腕が切り離されたというのに、苦痛を描いてもいない。怒りや憎

しみも同様だ。ただ濃厚な悪意と害意をふんだんに宿すばかり。ここまで普通でない敵勢の様子に、2人の天使も表情を険しくする。揃って相手を睨み見つつ、各々の得物を構え直した。

「私の弓と矢は、私の望むものだけを射抜きます。大切な姉妹を傷付けず、邪悪のみを討つ事は造作ありません」

大弓に光矢を番え、翠の天使は毅然と言い放つ。

彼女の凜々しい横顔に、赤の天使は何時も感じる頼もしさを覚えながら、自分も両手に戦斧を握り、1度大きく回した。風を切る轟音を響かせ、大きく巡る一対の大斧。天使は手を止め、再度戦闘態勢を取る。

「ははあ、成る程ねえ。そーいう事かい。ふふフ、酷い話だ。サギじゃないか。やられたなあ」

不気味に嗤い続ける道化。

その視線上に落ちていた左手が、黒煙に变じ消滅した。だが消えたかと思えば、左腕の切断面から同色の煙が上がり、急速に渦巻いていく。それから1秒とせず煙は霧消。その後には、斬られたばかりの左手が甦っていた。

「嘘……」

目の前で起きた光景を信じられないと言う様に、赤の天使は呟く。在るか無いかの好機を掴み、僅かの隙を突いて遂に敵の体へダメージを負わせたというのに。それをいとも容易く無しにされてしまった。少女天使の受けたそのショックは大きい。

「主サマ……主サマか。それが君達の飼い主というワケだ」

驚きを露とする赤の天使を気に留めず、道化面は笑い顔のまま言葉を紡ぐ。

ただそれは誰かに向けたものではなく、独語に近しいもの。対話する相手もなく、ブツブツと奇妙な音階の声を虚空に散らし。

「なあるほど。君達のような存在は、この世界に本来ないモノだからねえ」

感情のない瞳で2人の天使を交互に見遣り、肩を上下に揺らす。体全体で笑うような仕草の前に、翠の天使は目を細めた。蒼い外套の男へ、不審と警戒を揃えて。

「ふふふフ、帰って主サマとやらに伝えるといい。この物語は僕等の物だ。僕等の望む終わり方にさせてもらうと」
ハッピーエンド

道化の口が更に吊り上り、より奇妙で不気味な笑みが深まる。

だがその表情よりも、天使達は男の言葉に疑念を抱いた。今の科せ白りふは、主の執筆した物語世界の住人「登場人物が言うべき言葉ではない」。

執筆された世界の住人は、自分達の生き住まう世界を唯一と考えるのが常。そして世界を世界と認識する故に『物語』などという表現はしないし、ましてや望む終わり方などという言葉は使わない。
ハッピーエンド

「それではまるで、貴方もこの世界の者ではないかのよう」

翠の天使がその疑問を口にした時、空間全体の空気が震え始める。いや、震えているのは空気だけではない。床も、壁も、天井も、深奥の玉座も、空間全てが震動をしていた。

突然の異変に、天使達は視線を周囲へ走らせる。何が起こったの

かを探り、そして程無く元凶へと思い至った。彼女達の目は自然にある一点へと合わされる。その先に在るのは。

「やっぱり、イイよ。伝えなくてイイ。だって君達は、此処で消えちやうから」

道化面が嗤^{わら}っている。天使達の瞳に射られつつ、愉しそうに。

それはさっきまでの笑顔とは違う。最も大きな差異は、緑瞳に浮かべられた感情の色。先刻まで無色だった思いの丈が、今の瞳には混ざり込んでいる。

「なッ!？」

「こ、これは!」

空間全体を震わすそれは更に強まり、巨大なプレッシャーが天使達へ襲い掛かった。

猛烈な勢いで2人を押し潰そうとするような、目には見えない凄まじい圧力。それまで感じたどれとも違う、そして何より大きい圧倒的な力の襲来。

天使達は全身に力を込め、奥歯を噛み締めて、これに耐えた。耐えながら、この世界で本当に愉しそうに顔をしている道化面を睨み見る。

「天使様を相手するのに、仮初の姿は失礼だったねえ。ふふふ、ふふふ、今度はちゃんと、真実の姿で相手してあげよう」

天使達の視線へ応えるかの如く、道化の瞳に宿る喜悦の色が揺らぐ。

合わせて空間中に満ちる大気が腐臭を含み、重苦しさを倍々に増し始めた。あまりの変化は視覚化される程に影響を強め、周囲一帯

を仄黒く染めてゆく。何処からともなく浸み出してきた闇が漂い、あちこちで青黒い火花を上げ出した。恰も雷雲の中。紫電の閃きを錯覚させる青の稲光が、闇の随所に走る。

「それって、どういう事よ！ まさか……まさか、今まで本気じゃなかったって言うのッ!？」

視界を塞ぎつつある闇を手で払いながら、赤の天使が叫ぶ。

もう相手の姿へ殆ど見えず、何処にあの奇抜な仮面野郎が居るのかも判らない。それでも一向に消えないその気配と、膨れ上がったいく存在感へ向けて、少女は声を張り上げた。

「ふふふふ、はははははははハ！ もちろんさア！」

闇の奥から底知れない笑い声が轟く。

時を同じくして、今まで床に散乱していた黒の鎧達が一斉に動き出した。粉々に粉碎された物から、比較的原形を留めている物まで、全ての鎧と剣が浮き上がり、螺旋を描き始める。膨大な数の鎧群はハリケーンに巻き込まれたかと思うような軌道で空間全体を飛び回り、強大な突風を起こしながら黒い靄へ変化していった。

その靄が、そして空間を満たす濃い闇が、凄まじく渦巻きながら、徐々に徐々に集まっていく。

赤と翠の姉妹天使は備える翼を全力で働かせ、吹き荒れる暴風に投げ飛ばされぬよう必死で抵抗していた。その最中に観る。暗色の黒意が集う中心で、嗤い立つ道化面の姿を。あの不気味な男を包み込み、凝縮されていく暗黒の渦を。

9 筆目：滅竜顕現、第二幕の始まりだ

無量の闇が濃縮し、道化面の全身を覆っていく。

異常な密度に至る暗気はその四肢へ被さり、軀へ纏わり、頭部へ巻き付き、細部までを取り込んでいった。

死の瘴気に包まれた道化は、天使達の眼前で等身大の球へ変異。闇色の大球は空間の中程に浮き上がり、動きを止める。そこから音もなく微かに震え、次の瞬間、急激な膨張を遂げた。

元々の大きさから数十倍にまで極大化した闇は、その表面を流れるように揺らぐ。強風に煽られた水面を思わせるたゆたいを経て、暗色の陰気で飾られた球の全面は静かに波打つ。一切の光を通さない真闇の天球は、世界に生まれた汚点であるかのように、無情な態で存在感を誇示していた。

純粹な邪悪さのみを強め、球は死の歪音わあん進らせて、忌まわしい胎動を開始する。脈打つ腐気が焦土の気配を滴らせ、地獄の門かんぬきを引き抜いた鬼の形相が如く、救いの無い猛悪ぶりを奮起させた。何人も祝わぬ滅びの生誕を前に、此の世の悪鬼邪妖が百万の歓声に迎え入れた事を、天使達は錯覚せずにはられない。

滾り続ける負の因縁は重さと苦しさとを招き、格段に溢れさせた怨念に不遜な鼓動を重ねさせる。半壊した魂の嘶いななきか、はたまた堕ち行く亡者の断末魔か、生と死の狭間で交錯する魔性の怖気かくどは赫怒を高め、忙殺の顎あごとを開いて静寂を噛み砕いた。

沸騰する溶岩に似た低く陰鬱な胎音は、不気味に響いて空間を満たす。絶えず天使達の耳朵を冒し続ける脈動が、一際の高まりと異形の怪音へ成長した時、遂にそれは起こった。

闇球の内側あんちゆう、両側面より鋭利な爪を備えた腕が突き出してくる。否、腕というよりも脚。前脚と言った方が適切な、そんな形状の物。これに続いて似通った形状の後脚が、球の側後面より伸び出した。

それからは瞬きの間に現状が変転する。前後の脚を送り見せた闇

の塊が、急激に上下へと進み、捻れるように収縮し始めた。その全容が細まり詰めると同時、静かに闇が崩れ、晴れ行く不浄の内面より新たな躯体を現し出す。より正確に言うならば、闇そのものが集まり、溶け合い、統合して、それを実体化させたのだ。

「こんな……」

翠の天使が、前方に屹立する果てし無い巨躯に、啞然とした声を零す。

赤の天使も同様で、彼女の場合は呆けたように口を開けたまま驚き顔を固めていた。

天使達の瞳に映るは威容にして偉容。そして異容。

山城と見紛う程の巨体、長命たる大樹の幹を思わせる太く頑健な四肢、その先端に伸びるのは長く鋭い五爪、下半身後方から肉厚にして柔軟なる尾が流れ、後背には大鷲に似るだがそれよりも遥かに巨大な暗色の翼が揃う。

前方に長い鼻先の形状は蜥蜴に似、大きく裂けた口と、その内側に居並ぶ獠猛な牙の群が見えた。顔の上段中央部から両端へ緑の眼球が蜘蛛の複眼よろしく幾つも在り、長き首その回りには真紅の鬚たてかみが揺れる。

全身をくまなく覆う漆黒の鱗、ある種神々しくさえある大躯、現存するどの生物をも凌駕する存在感、威圧感。それは多くの伝承や神話に語られてきた、脅威の超生命体『ドラゴン』そのもの。そう。今、天使達の眼前には、漆黒の巨竜が尊大な御姿を露としていた。

道化面が現した真の姿、それは闇色に聳える超大なドラゴンである。その在り様を見、天使達は愕然とした虚脱状態に陥った。より一層膨れ上がった相手の迫力に当てられ、再び身動きが取れなくなっている。ただ前方を注視し、自分達を見下ろす異形を眺めるばかり。

『やっぱり、本来の姿はイイねえ。前の格好は、肩が凝ってしょう

がない』

巨顎を動かし、大竜が嗤^{わひ}う。

その声は大気を震わせず、天使達の頭へ直接響いてきた。意識の内側で乱反射する声は、彼女達の神経を故意に傷付ける悪意へと染まる。

そのまま竜の巨躯が緩やかに降りて来た。今まで空中に停滞していた体が高度を下げ、前後の四肢が床を踏む。瞬間、凄まじい地鳴りと震動が巻き起こった。

ドラゴンの4脚が硬面へ付き、恐ろしく巨大な身を支え体重が大地に掛かった事で、地震に近い衝撃が全域へ走る。激しい鳴動に続き、天井からは構造材の破片が磨り潰された粉粒となって降り落ちた。

「ど、ドラゴン……」

こうして発生した大きな揺れに自身等も身を振るわせつつ、赤の天使が呟く。

眼前の黒竜は緑の複眼を奇妙に光らせ、その1つ1つに天使達の姿を映した。合わせて首を動かし、彼女等各々の顔を覗き込むように近付ける。硬く滑らかな暗色の鱗が筋肉の働きと共に動き、光さえ飲み込んで離さないだろう漆黒の輝きに少女を照らした。

『そのとオーリだよ、天使チャアアア〜ん。ファンタジーの王道、どお〜ら〜おお〜んさあ』

押し出されてきた竜の顔が、大きく引き裂かれた顎が、その奥で粘つく唾液に濡れた牙が、天使達にギリギリまで迫る。

真紅に染まった口腔から、死と腐臭に塗^{まみ}れた吐息が溢れ、彼女等の全身を襲った。

『ふふふフ、僕は、僕等は滅竜族。此の世の均衡を崩す存在、それを見出して滅ぼす事を定められた、世界の守護一族だ。数多の世界で最も雄々しく、最も残忍で、最も強大な、天に愛されたる神の子だアよ』

複眼をギラつかせ、漆黒の竜は嗤^{わら}い上げる。

天使達の頭に反響する声は豪笑だが、邪竜の口から溢れるのは巨大な咆声。言葉の形を取らない雄叫びは天地を揺るがし、彼女等にも尋常ならざる動風を叩き付けた。魔性の激轟が生み出す暴風の吹き荒れる中、赤と翠の髪が揃い揺れる。この下にある少女等の顔には明確な戦慄が宿り、眼前の巨悪へ幾許かの気後れを示した。

『君達には名譽と思つて貰いたいなア。僕がこの姿になるなんて、凡そ400年ぶりなんだからねえ』

強大に吠え上げながら、竜が首を天蓋へ仰ぎ向ける。

大きく首を反らし、天井を見上げた巨竜。その口内に青黒い輝きが灯った。強い光を発す青と黒の明滅、双色が交わった複合光は牙の合間から外部へと燐光を飛ばし。高く掲げられた黒竜の頭部へ夥しい力の集約を教えた。

「いけない！」

竜の口部へ集う力の渦。これを察した翠の天使が、訪れた危機感へ対し切迫した叫びを上げる。

彼女は反射的に滅竜へ背を向け、手にする大弓を玉座の傍で倒れる少女へ向けた。白い鎧に包まれ、床へ倒れ伏したまま動かない彼女へと、弦を引いて矢を生み出し、狙いを定めて即座に撃ち出す。

瞬時に宙空を駆ける光は少女の真上へ達すと、そこで四つの欠片

に分かれ、周囲から娘子を囲った。欠片達が望まれた位置へ配置された後、それぞれの微光から翠の線が飛び、隣接する欠片同士で繋がり合う。少女の上の一つ、その周りへ三つ置かれた欠片が全て線で結ばれた時、翠光は三角形の障壁を形成。内側に在る少女を包み、彼女を護るべく完成された。

時を同じく、赤の天使もまた動きを見せる。

翠天使の背後へ素早く移動し、姉妹天使を庇う形で竜の前に立った。手にする戦斧を炎へ変えて、両手を目線の高さで空へ突き出す。物質から変じた炎を双掌に揺らめかせると、これをより激しく燃え上がらせた。広げられた炎はすぐに膨れ上がり、赤の天使と背後の翠天使を、小規模なドームと見える炎膜に覆う。灼熱の囲いは少女等を外界より隔絶し、一分の隙もなく関連性を断った。

『ただ、この姿になると手加減は出来なくなるからネ。ふふふフ、激しすぎに御用心！』

上向けていた首を動かし、天使達へ見下ろす位置取りで首を曲げる。

そうした竜の口腔には、燃え上がる青黒い炎熱が巨大な塊となって存在していた。

真実の姿へ至った道化面が口を上下へ押し開く。檻とも見える牙の羅列が拘束を消すと、そこへ閉じ込めていた焰塊が解放された。魔竜の口から青と黒とで彩られた獄熱が躍り出、この波は一直線に天使達へ突っ込んだ。

赤の天使が張った炎の護りへ、斜め上方正面から青黒い炎が激突する。半球状の防御結界は、しかし一瞬で襲来した火炎群に飲まれ、瞬く間に姿を消した。

竜の口からはそれでも尚、闇の滅亡炎が吐き出され続ける。際限なく増長する炎は天使等を喰らった後、床を打ち、これを伝うように広範囲へ走り渡った。急速に広がる火炎の流れは床面全体を隠し、

空間の深奥部まで一気に染める。途中、翠の護陣に護られた白鎧の少女も居たが、この護り毎彼女を取り込み、突き立つ剣を含み、玉座を融解させ、果ての果てまで黒炎は席卷。見渡す限りを激熱の奔流に沈み入れた。

更に炎へ変化が覗く。床一面を舐め敷く炎は所々が渦を巻きながら、徐々に上方へ伸び始めた。最初は小さな糸のように天へ走った炎も、捻りを強め、刻々と太さを増し、より激しく振られ、あれよと言つ間に遠き天空へ駆け上る。

その姿は竜巻。灼熱に燃える、青と黒の竜巻だった。竜等の存在する四角い空間、その下面域を満たした炎から竜巻が立ち、空間内に夥しい熱と力を備えた颶風を暴れさす。

巻き起こった竜巻群は床と天井を繋げ、うねりながら当て所もなく移動し、その場へ留められた温度を急上昇させた。それに合わせて青黒い大旋風も威力と太さを増し、荒れ狂う勢いさえ強大化。屋内である事が嘘のように、縦横無尽な軌道で全てを削りいく。

そんな物が暴れ続けるのだ。空間を形成する硬材達とて保つ筈がない。

床は激しく捲れ上がり、割れ砕け、瓦礫片を撒き散らしては竜巻に飲まれて消滅する。壁にも大きな亀裂が次々走り、次第に崩れては、床材と同じ運命を辿った。そして天井。猛り狂う膨熱の火柱が群舞に叩き上げられ、長らく耐えていた其処も遂に崩壊の時を迎える。

竜巻の接面から幾筋もの輝を刻み、構築材同士の噛み合いがずれ、一塊ずつ落下を始めた。落ちて来た天井の一部分は、床へ激突する前に近辺に行く竜巻に巻き込まれ、熱と力で粉々に砕け、溶け、完全に霧消する。一連の現象が天蓋の随所で起こった後、下から押し上げる青黒の旋風群は、機能の多くを失った天井を撃滅。硬い覆いを取り払い、巨大な材片を降り注がせながら、開かれた真の天空へと立ち昇った。

かつて天井を構成していた硬材は竜巻の群に当てられ消え去り、

多量の埃さえも炎が焼き払う。土煙など一切噴き立たせる事なく、覆いに隠された空を晒した。

『ふふふフ、はははははハ！ やはりこうでないと。何時までも狭苦しい室内にいますと、黴かびが生えちゃうからねエ』

大顎を閉ざし、吐き付けていた炎を止め、巨竜は天に向かって咆哮する。

開かれた先にあるのは一面の黒。暗黒の色。そこへ瞬く遠き星々の煌き。夜空だった。満天の星空が、竜の複眼に映り込んでいる。何処までも広がる雄大な銀河の写し身が下、夜の闇より尚深く、尚昏い漆黒の竜は、愉しげに嗤わらい続けた。

『さア、燃えてきたよオ！ この世界が命運を別つ、天使と竜の殺し合い。愉快なショーの第二幕、始まりだアツ！』

悪竜の背に生えた双翼が大きく広げられる。

それが激しく羽ばたき始め、見えざる突風を生み出した。巨大な風の流れは床全体を打ち比し、この一帯を覆い隠す熱波の大海を吹き散らす。大風に煽られた青黒い炎の軍勢が、竜より叩き送られる猛風に従い、随時駆逐され。それはあの竜巻達とて例外にはなく。床を占めた炎の消滅に伴い狂暴なハリケーンも、まるでケーキの上 に立てた蠟燭の炎を吹き消すかの如く、数度の揺らめきを経て立ち消えた。

そうして現れるのは、粉々に砕け、殆ど原形を留めていない床面。激しい炎力に抉られ、引き剥ぎ、剝むり貫ぬかれた硬材の、無惨な姿。何もかもを焼き、破壊し尽した黒竜の破炎。それが過ぎ去った後には、救いの要因は微塵もない。

ただ唯一、静かに、健気に、されど確固として息衝く三つの命を残して。

『ふふふフ、そうこなくちゃ。こんな所で終わられたら、僕が滅竜族とうのすがたの本体になつた意味がないからねえ』

竜の持つ緑の複眼が、床上に立つ赤と翠の天使を捉える。

2人共、幾許かの煤汚れはあるものの、目立った火傷云々は見られない。あれだけの大火に襲われながら見事耐え抜いたのは、赤の天使が作った炎の防護膜にかなりの力があつた証拠。

加えて彼女等の後方には、依然として倒れたままだが、こちらも焼け傷の見られない少女が伏す。翠の天使が放つた矢、そこから作りだされた結界が彼女を護つたのだ。しかも少女の使っていた剣もまた、床に立つたまま損傷なく残されていた。

「天井が、無くなつてる」

若干の疲労を面上に刷はきつつ、それでも戦意損なわぬ赤の天使。彼女は頭上の変化に驚きの声を漏らす。

見上げた先には硬質な天蓋はなく、代わりに果てし無い星空が覗くのだ。天使の驚きも道理と言える。

「あの姿は、伊達ではないということ」

少女天使同様、空を見遣る翠の天使。彼女は自分達を焼き払わんとした相手の力量へ思い至り、表情を多少なりとも硬くする。

驚嘆と恐怖を半々に顔を正面へ戻し、異形の巨竜を今一度視界に置いた。

『このぐらいの事が簡単に出来ないようじゃ、世界を護るなんて不可能なのさ。圧倒的な力で、他を叩き潰す。それが僕等の遣り方だア』

愉しそくに嗤^{わら}う竜の精神波。

これを受け、赤の天使も敵対者へ視線を向け直す。改めて対峙する両勢の間に、強い緊張感が生まれた。

「戦う以外にだって、遣り方はあった筈だよ」

「力を通すばかりじゃありません。話し合いで解決出来た問題だって、きつと」

2人の天使が非難めいた瞳を、対面の大竜へ射込む。

闇と腐と死に彩られた漆黒の魔竜へ、その生き方、遣り方へ、反感と抵抗の意思を投げた。そもそもに於いて、相手が有無を言わずに強行手段にさえ出なければ、彼女等とて戦う必要は無かったのだ。その思いが声に乗り、糾弾の言葉となつて道化面へ向かう。

だが竜の反応は、思案でも後悔でもなかった。

「他の遣り方？ 話し合い？ ……ふふ、ふふふフ、ふふはははははははハ！」

竜の顎が限界まで開き、その内奥からけたたましい大哮が溢れ出る。

それは大気を激しく鳴動させ、天使達の五体を揺さぶり、彼女等の脚を僅かながら竦ませた。

「君達は道を歩く時、いちいち蟻と会話をするかい？ 君達は花畑を散策する時、逐一虫達の動向を気にするかい？ その生涯に思いを馳せるかい？ ふふふフ、はははははハ、そういう事だよ、天使ちゃアアん」

荒々しい波長が天使達の胸中を叩く中、竜が翼を1度羽^はためかせ

る。

これに生じた烈風が空間を走り抜け、天使の赤と翠の髪を、身に付ける着衣を、大きく靡なびかせた。前後して、彼女等の顔に険しさが浮き、目も厳しいものへ変えられる。戦いが避けられない事を、知った者の顔へ。

『簡単に果ててくれないでくれよ、天使ちゃん達。愛しい愛しい、羽虫共よオッ！』

それまでで最大の咆声上がる。

凄まじく重い暴風が叩き吹き、破壊の意思が全てを襲った。

天使達は咄嗟に身構え、各々の武器を実体化。戦闘態勢を整えると同時に、漆黒の竜が右前肢を振り上げる。鋭利な爪を備えた野太い脚が、竜の巨肢が、少女等目掛けて走り来た。

10 筆目：無惨敗北、最後はやっぱり悪が勝つ

急接近する巨大な前脚から、赤の天使は逃げようとしなない。

それどころか両手に握る2本の戦斧を頭上で交差させ、強固な防御姿勢を取った。

その直後である。一気に落とされた竜の前肢が、微塵の加減なく少女を叩き付けた。重く激しい衝撃が天使を頭上から打ち据え、その細身へ非常識な程の圧力が掛かる。その一撃を受けた床は当然のように砕け、陥没し、割れた床材が部分毎に隆起する。

この中心点に在り、竜の猛撃を迎え撃った天使は、けれど潰れてなどいない。

彼女は頭上で交差された斧の合わせ目を真ん中に置き、自らを押し潰さんとする悪竜の脚に耐えていた。両脚は割れ果てた床面に減り込み、腰も落ちて蟹股^{がにまた}状態だったが、竜の右脚を体の何処にも触れさせず、戦斧の刃と柄、これを押し上げる腕と全身の力で抗っている。

小柄な少女が、巨竜の踏み付け行為を単身で耐える。それは大きなギャップを孕んだ異様な光景だった。

「くぬぬぬッ！」

奥歯を強く噛み締め、喉奥から気合と根性の合音を絞り出し、赤の天使は全力で振り下ろされた竜の脚を押し返そうとする。

そうなのだ。彼女は敵の一撃を防ぐだけでなく、これを独力で跳ね飛ばそうとしていた。気張る度に先刻受けた裂傷から血が滴り、肌を赤い筋が伝う。

限界まで力んだ顔は赤みがさし、真剣というよりも必死の形相。

可愛いと言い難いが、彼女の本気が見て取れるので魅力的と言えなくもない。

彼女の後ろに立っていた翠の天使は、赤の天使が敵撃を受持った事で、後方へ大きく飛び退いた。

宙を滑るように弧を描き、着衣のローブを閃かせて床へ降り立つ。竜から一定の距離を開け、床に着くと同時、天使は手にする弓へ光矢を番え、敵勢の眉間へ狙いを定める。体側に引かれた碧の弦と、グリップの間に発生した矢。その光が一段階強まった時、彼女は矢から指を放してこれを射った。

解き放たれた光は高速で飛び、進路を曲げず標的へ襲い掛かる。一条の閃光と化し飛翔する矢は、魔竜の額へ接近すると急遽分裂。五つの光に別れ、それぞれが異なる部位へと激突した。

一つは当所の予定通りに眉間へ、他は全容を覆う黒光りの鱗各所、肩、首、翼、背へと吸い込まれていく。だが、翠光の矢は命中部を貫く事が出来ず、外鱗にぶつかり霧散してしまふ。後には翠の粒子が仄かに漂い散るのみ。

「効かない？」

翠の天使は攻撃行動を無力化された事に驚愕を表す。

今の敵は炎の結界を張っていない。にも関わらず矢は掻き消え、完全に抹消された。理由は簡単で、光矢の貫徹力を竜の防御性能が上回っていたというだけ。単純な攻防力の差である。尤も、だからこそ問題なのだが。

不可視の結界さえ無ければ、翠の天使が放つ光矢は道化面を射抜く事が可能だ。それは既に証明済みであり、彼女も認める所。だが今の道化面、黒の巨竜へ変じた相手は、小手先の防御策なくとも、自身の有する抵抗力のみで攻撃を寄せ付けなかった。即ち、能力の向上化が劇的に進んだ事を意味する。

赤の天使が振るう物理的大威力を誇る戦斧でも、容易には傷を付けれなかった敵。それに対して効果的と思われたのが翠光の矢で

ある。しかし、現状ではそれさえも通用しなくなってしまった。ダメージを負わせられない相手に勝つ事は不可能である。それが動きを止める役割さえ果たせないとなると、逃げる事も出来ない。反して相手からの攻撃は彼女達へ無慈悲に届いてしまうのだから、状況の危機的度合いは尋常でない。

敵の護りを突破し、なにがしかの方法で手傷を与えられるようにならない限り、天使達の勝機は絶無。その危惧から、翠天使の顔が険しさと厳しさを増すのは当然と言えた。

「まだです！」

眼前で起こった光景を直視していながら、それでも翠の天使は諦める事をしない。

姉妹天使が竜の巨脚を防いでいる間に、床を蹴って更に跳躍。一足飛びに竜の右側面へ回り込み、空中を横方へ移動しながら連続して弦を引く。生まれた光が翠の矢を形作り、天使の指運に従って、狙った相手へ、その部位へ、次々と向かい飛んだ。

飛射した矢は計6本。各自が竜の側体を的確に捉え、僅かな差異なく直撃を繰り返す。が、全ての矢は本来威力を発揮する事無く、魔竜の異様さ強める漆黒鱗に弾かれ、打ち消された。今回も1発とて決定打になつた物はない。

「くっ」

邪竜との距離を保つたまま、その横様を見遣れる位置に着地して、翠の天使は苦鳴を漏らす。

やはり先刻の事は偶然でなかった。相手の鱗が想像を絶す防御能力を備えているという現実、この望まぬ結果を突き付けられて、天使の胸中へ俄かに怯みが差す。

気持ちで負けては何も出来ないと言っているながら、それでも尚、

残酷な事実が彼女の前には立ちほだかり、闘争心を、戦いの意欲を奪い去ろうとする。それはなにも敵勢体の基本性能が圧倒的だから、だけではない。

相手の持つ闇の気が、腐の瘴気が、死の気配が、絶大な威圧感と圧迫感、其処に在るだけで生気を吸い尽くされそんな錯覚を覚える程の存在感。漆黒の竜を構成する全ての要素が、相対する者から刻々と気力と活力を搾り取っていくのだ。

もし人並み程度の精神力を持つ者がこの異容を見たなら、その瞬間に自我を崩壊させ、命までも失ってしまうだろう。何をされるでもない、ただ姿を見ただけで、その者の生の時間は終わりを告げる。この竜は、そういうモノだ。

並みの魔性とは決定的に違う。対峙する者を無条件で穢し尽くし、魂を喰らわんとする。存在そのものが、それだけで脅威であり、悪意であり、邪悪であり、死の呼び水。それが滅竜族を名乗る道化面だった。

気を抜く事は出来ない。相手へ対する抗いの心を完全に手放してしまつたなら、そこで彼女も終わってしまうのだから。

翠の天使は必死に自分を鼓舞し、奮い立たせ、目的を達するといふ強い意志を絶えず磨き上げる事で、何とか前を向き続けていられた。自身の心を挫けさせたなら、2度と立ち上がれないだろうといふ確信めいた予感もある。

負ける訳にはいかなかった。敵との間にどれだけ戦力差があるうとも、諦める事だけはすべきでない。この物語を望まれた終わり方ハッピーエンドに導くと決めた以上、自分には最後の瞬間まで戦い続ける義務がある。彼女はそう考えていた。誰に強要された訳でもない、自分で決めた事。自分に課したルールだ。

それに赤の天使も、自らの意志を曲げるつもりなどないのだから。此処で自分だけが膝を折って良い筈がない。その思いが、天使の全身に力を注ぎ、瞳に確かな輝きを与えていた。

対して、竜という真の姿を現した道化面は、決死の覚悟を固める翠天使に、全く興味を示していない。

彼女の動きを複眼の一つで追う事もせず、注意を向ける事さえなく、足元で踏ん張る赤の天使へのみ、意識を傾けていた。

徹底した無関心。竜は翠の天使を、意図的に無視しているのだ。何故なら、今の彼にとって彼女は警戒に値しない存在だから。

翠の天使が放った矢を自らの身に受けた道化面にとって、その威力・特性は既に知れている事。どの程度の脅威であるかを理解しており、現在の自分と照らし合わせて対策を練った結果、危険は微塵もないという結論に至った。

事実、翠天使の攻撃は蚊が刺す程度のダメージさえ負わせられていないのだから、その推察は正しかったと言える。だとしても、少々安易に考えすぎているくらいはあるが。

多分に相手の過小評価、自らの油断、慢心を持ち続け、それによって手痛い目を見ていながら、全く懲りた様子のない道化面。それは自分の力に絶対の自信を持つというよりも、イレギュラーな要因を敢えて残す事で、状況が思わぬ変転を遂げる可能性に道を与えている節がある。

その根底に見えるのは『決められたレールの上を走るのはつまらない』『予定調和に面白味はない』、そういう事だった。要するに、この邪悪根源のような存在は、自分の予想を裏切るアクシデント、それも全てを覆ってしまう程のとてつもなく巨大な異変が起こる事を、密かにどこか堂々と期待しているのだ。

理由は明快である。『その方が面白いから』これに尽きる。

道化面は自分達の目的を達成しようとしながら、同時にそれを転覆させてしまうだけの事件・事態の発生を求めているという事。ただ愉しみたいが為だけに。

人間時の姿も奇抜なら、思考回路もまた同様にエキセントリック。

道化面とは、脳髓の端から精神構造の片隅まで、全てが異端で出来ているようなモノ。常人の常識的思考で、彼人の心中を察する事は出来ない。

『小さいのに、頑張るねえ』

己が御脚の下で、これを抑え続ける赤の天使に、竜が笑声を送る。言葉は賞賛でも、内奥に滲むのは明らかな見下し。嘲弄の成分が濃い、馬鹿にしたものだ。

一方で、少女天使は反論する余裕もない。相手の声を聞いているかさえ怪しい程の集中ぶりで、押し掛かる巨大な脚を押し戻さんとする。気を緩めたら敵の力に潰されるという危機感が、余計に彼女を気負わせた。

『でも、弱イ』

両手、両脚のみならず、全身、全神経へ渾身の力注ぐ天使を踏みつつ、竜は左脚を振るう。

その軌道は真横への薙ぎ。平手打ちの要領で繰り出された叩き込みだった。質量へ伴い共に振り進められた豪風が、圧倒的な破壊力を従えて襲い来る。

真横から飛び出してきた漆黒の太脚に、赤の天使は対処出来ない。既に両腕は頭上に使い、己が身を護る術は皆無。故に、彼女は自らに迫る新たな一撃を瞳へ映し、驚愕と戦慄から大きく見開く以外に成す術も無く。

「っ」

少女の口が、悲鳴の形に動いた。

しかし声が上がりにきる前、竜の次手が天使を打つ。速度、重量、

備える力、それらが合わさり不可避の剛撃となつて、赤の天使を横合いから殴り付けた。

竜の脚が少女天使に触れた直後、巨大な衝撃が走り、轟音が響く。天使と竜の衝突は瞬間的に膨大なエネルギーを発生させ、その全てが押し負けた側へ科せられた。満足な防御行動も取れず、竜攻の直撃を受けた赤の天使へ。

迅速にして兇悪な一打は、天使を驚くほど簡単に吹き飛ばす。彼女自身、何があつたかを知覚出来ていただろうか。

考える余裕、思考の働くゆとりも無いまま、天使は爆発的な暴力に打ちのめされた。華奢な細身は冗談のように弾き跳び、投げられたボールの如く空中を走る。受けた衝撃の為にかなりの高速度で空間を進み、進路遠方にある壁へ急接近。勢いを維持したまま、天使は壁面に衝突した。

それでも止まらない体は分厚い硬材を数層分ぶち抜き、悉くを粉砕しながら奥へ突っ込んでいく。防ぎ手である壁が少女に掛かつていた威力を殺しきつた時には、彼女の体は壁面深くへ減り込み、くず折れた瓦礫の中に埋もれていた。

「な、んて……」

赤の天使を飲み込んだ壁と残骸、その山を見遣り、翠の天使は声を震わす。

姉妹天使の身を案じ、彼女の消えた壊穴を注視。灰色の埃煙が濛々（もうもう）と上がり、目的の人物はまったく見えない。それでも天使は諦めず、同胞の姿を求めて目を凝らした。

『人の心配もイイけれど、まずは自分の身が第一じゃアないかい？』

それまで全く意に介していなかった翠の天使へ、突如として竜の複眼が向く。

頭部に並ぶ緑の球体が一齐に動き、天使の姿を其処へ捉えた。と同時に、竜の右前脚が突き出され、翠の天使へ真正面から食らいつく。伸びた五爪を光らせつつ飛来した巨脚は、彼女の立ち位置へ飛び込み、床を激しく抉り、大穴を穿つ。

「おやや？」

だが手応えは無い。竜は思念波の内で疑問に首を傾げ、複眼をそれぞれ別所へ向けた。

幾つもの眼がすぐに天使を見付ける。翠の衣揺らしながら、吹き上がった床片と共に、高らかと舞う姿を。

天使は寸で竜の攻撃躲し、上空へ跳躍する回避行動を取っていた。その状態から次に取った行動は、滞空中より矢を作ったの照準合わせ。今度の狙いは複数ある眼球の一つ。頑堅な鱗に比べ、眼玉の方が討ち取り易いと踏んだ為だ。

彼女は指に挟んだ矢を引き絞り、一瞬で狙点を定める。自身の体が重力に引かれて落ちる最中、両瞳に収めた緑の眼へ、輝く翠光を放った。天井が崩れ、闇夜の帳に満ちた世界に在りながら、それでも天使の一射は正確無比。闇を切り裂く明光の道が空間を駆け抜け、目標へと過たず飛び込んで行った。

一条の光が複眼中央の一つへ命中した時、矢は内側から膨大な光を放出して周囲を照らす。光は同時に溜め込んだ力をも発散し、魔竜の頭部で閃光迸る爆発を引き起こした。

衝波が空中を疾駆し、大気を揺さぶり、翠の粒子を静かに降らす。渦中にて翠の天使は重さを感じさせぬ軽やかな所作で、爪先から静かに緩やかに床へと降り立つ。場違いなほど優雅な着地を終えると、姉妹天使の埋め込まれた壁へと視線を転じた。今の彼女が瞳には道化面への敵意や恐怖はなく、己が半身も同じ赤の天使へ向ける心配、不安、祈りが見える。

「大丈夫。あの子はきつと」

自分自身へ言い聞かせるように呟きつつ、天使は我知らず拳を握った。

強く固められる五指は、彼女の胸中に満ちる焦燥や怯えを物語る。その時だった。炸裂した竜の頭部、未だ淡い煙に燻る其処から、濃紫の炎が降り注いできたのは。

「っは!？」

煙幕を突き破って直進し、斜め上から天使を襲う炎。これに気付いた彼女は素早く身を翻し、床を蹴って横方へ跳び退く。

天使の逃走から半瞬後、炎は彼女の前居場所を直撃。腐り果て、蛆が湧いた生肉を力尽くで絞り潰し、溢れ出て来た煮汁を汚泥に混ぜ込んで掻き混ぜた様な、筆舌に尽くし難い異常な悪臭が、炎の終着点より立ち昇った。更に悪臭と相まって床はどす黒く変色、泡を吹きながら見る間に溶け崩れていく。

「そんな、まさか、腐っているの？」

翠の天使は左手で鼻と口を押さえつつ、数歩隣の床に起こった惨状に目を瞪る。

彼女の言葉通り硬材で設えられた床は、所々に見える欠損とは大きく異なり、物質そのものが急速に腐敗をしていた。天使の見ている前で落ち窪み、悪臭を放つまま泥状に変質する。本来ならありえない変換過程が、其処では現実に引き起こされた。

『だア〜いせエーかア〜い』

天使の心に、何度聞いても聞き慣れぬ邪悪の音が轟く。

即座に彼女は顔を上向け、炎の出所、薄くなつた煙の漂流場所を睨んだ。視線の先では空から続く闇の中に、緑の不気味な光が幾つもギラついている。そしてその光の一つ一つが、これでもかと天使の身姿へ焦点を定めていた。

『僕の吐く腐敗の炎は、ナンでもカンでも腐らせちゃう。ふふふフ、生ゴミ処理用に、一家に一台欲しい仕様だネ』

嗤わらい続ける竜は健在。

光矢の爆発に晒されていながら、眼球はどれも損なわれていない。全くの無傷。

その結果が、天使の頬へ冷たい汗を伝わせる。

『価値としてはそうだなア、ジューシユーナ肉のパン挟み、四個分ぐらいかな？』

奇天烈な言葉に反して、竜の行動は兇悪。

口部を上下に開くと、唾液滴る牙の狭間、更にその奥にある喉の先から、2度目となる濃い紫の炎を吐き出す。狙っているのは当然と言わんばかりに翠の天使。狙われた側は床を走り、炎の襲来から逃げ出した。

襲い掛かった床を焼きながら、天使の移動後をなぞり進む紫炎。炎に当てられた箇所は猛烈な悪臭を吹き、無惨に腐り落ちていく。

翠の天使は止まらない。止まらない。足を止めれば、あの炎が自身を生きたまま腐敗させるのだ。目に見える凄惨な危機を回避する為には、走り続け、逃げ続ける他に無い。

『逃げてばかりじゃ、僕は倒せないよオ。ほら、向かっておいで』

逃げ惑う天使を見下し、嘲笑い、竜は腐浄の炎を吐き続ける。

翠の天使は唇を噛み、目で巨竜の威容を見たまま走行に耽^ひつた。自分のすぐ後を追い駆けて来る炎から逃げ、竜の側面へ回り込むが、相手もまた四肢を動かし体向きを変えて逃亡者を追う。

彼女を腐らせるまでは、諦めるつもりが無いらしい。それは竜の執拗な追跡からも見て取れる。

「それなら！」

尚も走りながら、翠の天使は右手の大弓を竜の開口部へ向けた。炎を噴く為に開かれた口の中へ直接、光の矢を射込む腹積もり。それを証明するように、彼女は足を動かしまま、左手で仄かに光る弦を引く。

だが、天使が矢を射放つより早く、邪竜の鼻先に飛来物が激突した。

『なんだお？』

突然の衝撃に竜の複眼が四つほど動き、自らの視線を捉える。それらが緋色の戦斧を認識するかしないかの一瞬、衝突物が激しく爆発。爆熱を拡散させ、真紅の衝撃波を解き放ち、夜闇を赤らかと照らした。これによって竜の口は閉ざされ、紫の炎も共に掻き消える。

「やっぱり！」

翠の天使は顔には安堵と喜びの色を満面に浮かべ、視線を一ヶ所に飛ばす。

同時に発生させた矢を放ち、今起こった爆発点へこれを撃ち込み。赤の灼熱に合わせり翠の閃光が弾け、第二の衝撃と炎風がより大き

な破壊の奔発を生んだ。立て続けに起きた爆裂の力が魔竜の頭を完全に隠し、巨体に蹈躡たたらを踏ませる。

そんな敵勢体には構わず、天使は大斧の飛翔方向を見た。崩れた壁、瓦礫の山、そこに姉妹の姿を求め。

「まだ……まだアツ！」

けたたましい大喝が上がり、粉碎された壁の残骸が勢い良く吹き飛んだ。

翠天使の期待通り、折り重なる瓦礫を押し退けて、穿たれた壁穴の奥から赤の天使が歩み出て来た。彼女は全身を埃と煙粉で万遍なく汚し、腕や脚、肩や頭から赤い血を流していたが、それでも瞳に変わらぬ闘志を燃やしている。いや、寧ろ以前以上に荒く烈しく、打倒道化面の決意を煌かせていた。

けして軽くない負傷をほぼ全身に刻み、重度の打撲によって猛烈な痛みを感じている筈なのに、少女天使は右手へ戦斧を強く握り込み、異形の敵を睨みながら前へと進み出る。爛々と輝く双眸は復讐の炎に揺らぎ、小さく可憐だった少女へ、飢えて凶暴となった魔獣めく迫力を付与した。

ゆっくりと、だが確かな足取りで踏み出す天使は、左手を開いて前へ突き出す。すると掌へ紅蓮の猛火が生じ、炎が見る間に姿を変えて、再び戦斧を形作った。

次の瞬間。

漆黒の巨尾が横一閃に振り払われ、赤の天使を叩き飛ばす。

華奢な少女を猛然たる威力で襲った竜の尾は、彼女を一拍の間で彼方の遠壁へと放り遣った。向かった先は玉座が在った更に奥。空間の深奥の果て。

天使には僅かとして抵抗させず、圧倒的な速度と力で弾きさらし、その身を再度別壁に叩き付ける。轟音を響かせて崩れ落ちる瓦礫が、赤の天使を先と同じ様に下敷きとした。それが止めの一撃。無数の

亀裂によって倒壊してきた材片は山となり、後にはもう動く者の姿はない。

「え？」

翠の天使が呆けたような声を漏らす。

彼女の視界から今の今まで見ていた愛すべき姉妹の姿が、唐突に消えた為。彼女はしかと見ていながら、信じ難いという思いが心に空白を生む。

無事な姿を強く望み、その末に再会を果たし、安堵を得た直後、討ち取られた。目まぐるしく移り行く状況に、翠の天使は思考を僅かなりとも止めてしまう。今此処でそれをするのは自殺行為であると、誰よりも判っていたのは彼女自身だったにも関わらず。

『勝った』

頭上から聞こえた咆哮に反応して、翠の天使が顔を上げる。

その視界一杯に見えたのは竜の姿でなく、濃紫の炎。

全てを腐敗させる悪魔の息吹が、翠の天使を完全に包んだ。彼女を立ち位置諸共飲み込み、紫炎は温度無き内側から強烈な悪臭を放ち始める。

11 筆目：解放真威、眩い光を呼び起こせ

濃紫の炎は視界を塞ぎ、全身に纏わり付き、呼吸さえ妨げ、天使を世界から閉ざす。

全てから遠ざけられ孤立させられた彼女は膝を折り、両の膝頭を床に打ち付ける。重い糸へ手繰られるように体は前のめりへ倒れ、しかし寸前で両手を突き、床との衝突を免れた。

不浄の炎は覆った対象をじわじわ焦がし、被さる彼女を貪り始める。

1本、また1本と抜け落ちる翠の頭髮。天使の足元に落ちたそれらは急速に縮れ、腐敗し、消えて無くなる。皮膚は爛れて異色に変じ、艶を失い、張りを失い、ささくれ、乱れて、乾ききり、徐々に徐々に崩れていく。全身から猛烈な悪臭が立ち昇り、破裂した血管からは泡立つ血液が流れ出る。床に落ちた赤は黒く染まり、硬材と共に溶けて果てた。

額に浮いた脂汗が粒と化し、視点の中心へと滴り落ちる。既にその顔へ生氣はなく、無数の筋が走る中から薄い煙が噴き出していた。美しかった顔はまだ原形を留めているが、それとて辛うじて。時間の経過は1秒一瞬が天使の美を食い潰し、掻き乱し、引き千切り、醜悪な肉塊への道程を突き進ませる。

生きたまま死んでいく、破滅への色合いは濃厚で、それでいて慇懃。礼儀正しく、節度を持って、律儀に、俄かに、確実に、しかし無情に、無慈悲に、無感動に、獲物を定められた形へエスコートする。逃れる事は出来ない。もう不可能。囚われてしまったのだ、逃げ切る前に捕えられてしまったのだ。残念、無念を嘆く暇さえ、今はもう与えられない。全て全て、奪われるばかり。

『君達は実際、よくやったよオ。僕に、この姿を取らせたんだからねえ』

竜の声が、仮面の者の真の声が、天使の内に響く。

返事など出来ない。向こうも期待してはいない。完全なる滅びの刹那、そこまでの時間潰しというがの如く、一方的に流れ込む嗟い声。

夜気を震わす咆哮も、天下を貫く雄叫びも、とつくに天使へ脅威感じさせるに至らない。それどころでは、ある筈もない。

「僕が本気を出して戦ったのは、ほんとくに久しぶりだア。この物語^せでは、不要な存在を粗方狩り尽してしまつたからネ^{かい}」

天使を包む衣も端々に汚れが生まれ、虫へ食われたように広がっていく。

汚れに見えるそれは、拡大する最中に中心点から溶け落ち、少しずつローブを剥ぎ取り出した。無論、彼女自身に抗う術はない。寧ろ、気にしている余裕すらない。体が朽ちていく、腐っていく、崩れていく、その苦痛と苦悶は気を狂わせかねないのだ。何も考えられはしない。

「今は事後処理、残党狩り。まア、遊びみたいなものだあゝヨ。他の皆は、もうこの物語^{こい}に居ない。とつくに他の物語^よへ行つてしまつタ^ら」

竜の声に包まれて、天使の翼が砕け散る。

まるで腐る事を良しとせず、そんな醜態を晒すぐらいなら、いっそ壊れた方がマシだとも言うように。

彼女の頭、耳の付近から、数枚の羽根がゆらゆらと揺れ落ちた。けれどそれらは床へ着くと、硝子みたくに四散する。粉々に散つた破片は転がり、うっすらと透けて、静かに消えていった。

『だからねえ、ずっと、退屈だったんだよ。ふふふふフ、久方ぶりに骨の有るお客人と会えて、僕は嬉しくて仕方ない』

心へ直に届いてくるが、どこか遠い魔性の声。

それを彼方に聞きながら、異常な程に速まっている自身の鼓動を聴く。

耐え難い苦汁に染まり、息すら吐けず、判然としない音響の果てで、天使は茫洋とした意識に、数多の思い出を映し見た。

見聞きし、感じ取り、学び、覚え、自らの物としてきた数々の経験、体験、育ててきた意思と心。その隣へ常に在り、全てを分かち合った姉妹も同じ天使の姿。共に泣き、笑い、怒り、驚き、楽しみ、動き、歌い、こなし、踏み越え、吸い上げ、取り入れ、今に至るまでを辿つて来た諸々の記憶。

そんな彼女達を穏やかに見守り、時に意地悪くからかい、それでも慈しみ、大切に擁護し、成長を促したる創造主。そこにあったのは幸福に満ち満ちた3人の世界。色鮮やかな至上の楽園。失い難い希望と願い、期待と歓喜と楽しみが、残り香となって尚強い芳香を放つ。

その全ては今、遠い過去のものになろうとしていた。忘却の果てへ消え、一切合切有無を言わず、彼女の手から記憶から、零れ落ちてしまおうと。

天使自身の死を以って。その身の腐敗、腐滅を境にし。

『でも、もう終わってしまった。たあゝのしーい時間は、何時もそうだ。気が付くと、お帰りチャイムの時間だよ。鴉と一緒に皆は還る。始まりの様な無に。そしてまた、膨大な退屈が僕を飲み込む。ふふふ、ふふふふふフ』

翠の天使は思う。

痛みを超えた苦痛の先で、這い寄る死に抱かれながら、魂の終わ

りを自覚して。

それでもまだ、止まりたくないのだと。停まる訳にはいかないのだと。

数多の記憶が思い出が、失うには惜しい追想の羅列に、緩やか染み入る誓いの言葉。手放せぬ数々の色と香りに満ち溢れ、確かに浮き立つ約束の声。

それが微かに混じる度、天使の意識は固まっっていく。深淵の奥底に落ち続けていた心の芯が、今一度、今一度と、ずるずる這っては巻き戻る。思いの中に残された、姉妹の声へ引き寄せられる。

『脆い、儂い、汚い、弱い、薄い、小さい、切ない、軽い……そんなモノじゃ終わらない。そんなコトじゃ終われない。そうなんだろう？ まだなんだろう？ 僕ならそうだ。君ならどうダ？ もっと、もっとだヨ。足りない筈だ、足れない筈だ。満足するには程遠い。そうだろうとも、お互いニ』

壊れ始めた体とは対照的に、彼女の決意は新たな形を取り始めた。遠い異形の声は意にも介さず、持ち直した心は一つの意志を謳い飛ばす。

立ち上がれと。前を向き、拳を握れと。敵を見て、歩を踏み出せと。己が魂を、全てを、何もかもを、欠片も残さず奮い起こし、勝利の為に戦い続けると。

そして掴めと。赤の天使が望み、自身も願った、ハッピーエン望まれた終わりを。^ド

『来い。こい、コイ、こい、来い、コい、こおおオオイ！』

竜の咆声に揺られてか、はたまた腐食の炎に崩されてか、天使の首から何かが落ちる。

それは金の首飾り。創造主から与えられた、黄金に輝く大輪の覆

い。

それが今、音も無く外れ、天使の視界へ床の上へ、静かに素早く直落ちる。

天使の瞳に、1度も見た事のない首飾りの内側が見えた。そこへ刻まれた見慣れた筆跡と共に。赤い細文字、それは語る。

《今まで黙っていたが、コイツはお前達の力を抑制する重石おもしのような物だ。お前達が全開でヒスを起こし暴れたら、俺も只では済まないのでな。保険を掛けておいたのさ。アクセサリとしても丁度良いだろ？俺のプレゼントが壊れる程の事態になつたなら、その時はお前達に眠る本当の力を解き放て。大抵の事はどうにかなる。それでも駄目なら、ケツ捲くって帰ってこい。無茶はしてもいいが、無理はするな。それだけだ。……ニヒルで素敵な主サマより、我が最愛の娘達へ》

文字を追う目が最後まで見通すと、彼女はゆっくり瞼を閉じた。訪れた闇の中、波打つ感情の内側で天使は微笑む。唇が僅かに動いた。

「本当にあの人は、悪ふざけが好きなんだから……」

小さな呟きが炎に溶ける。

閉ざされた瞼から、一つの雫が零れて落ちる。

彼女の体感時間は壊れた時計のように刻みを止め、自身に及ぶ全てを此処でない何処かに感じさせた。痛みも苦悩も今は遠く、凪いだ湖面と同じ平坦な世界が、天使の内に広がり深まる。

音が聞こえた。自分の鼓動、血脈の流れ、筋肉の収縮、靱繊維の轟き、骨格の軋み、細胞の分裂音、自身の息遣い、そして、差し迫る波の歌声。眠らされていた大きな何か、再び動き始めた始まりの音。まるで姉妹と歌った歌のように、それは響き、次第に激しく

なってくる。

歌は蠢動へ、蠢動は激流へ、激流は大哮へ。目まぐるしく変わる世界に、闇の奥に、光が爆ぜた。

床に突っ伏した翠の天使より、眩い光が迸る。大きな輝きは翠光の柱となり、天使を包んで空を目指し聳え立った。

彼女を襲った炎は光に払われ、瞬時に容易く掻き消える。代わりに巨柱が、竜の複眼を余さず占領。莫大な光量は、夜の闇を真昼のように照らし上げる。

『ふふフ、はははははハ、そうでなくちゃア。それでこそ、お愉しみだア！』

竜が巨顎を限界まで押し開き、喉を震わせ上げるのは歓喜の咆哮。その声は天地を穿ち、怒涛の激震を世界に見舞う。されど身動きしない光の柱は、取り分け眩い閃光を放って全てを包んだ。

一瞬ながら白む視界。闇の払拭された微かの時間、確かな静寂が其処に在った。竜も城も闇夜も少女も、何も存在しない純白の世界。只2人、翠の天使と赤の天使が、互いに互いを見詰め合う。交差する2色の瞳は、等しい感情を湛えて蔽かに煌いた。

光が消え、闇が戻る。

竜は佇み、少女は倒れ、破損した城が天空へ大口を開ける中、その天使は瞼を閉じたまま、空中に立つ。翠の衣と翠の髪を夜風に揺らし、翠の天使は浮かび止る。

髪も、肌も、着衣も、顔も、翼も、全てが最初の美しさを取り戻し、小さな傷さえ残さず確かに在った。その背中からは淡い翠の輝きが、六つの光と化して拡がり伸びる。恰も翅だ。頭に生える左右2つの翼とは違う、鳥の翼、羽毛の翼、それとは異なる垂直平面の翅。どちらかと言えば、昆虫のそれに近い、光の翅。

六つの光に支えられ、天使は空に。空中に。
そして閉ざされていた両の瞼が、ゆつくりと押し上げられる。露
になる瞳へと外界の光景が映り込み、瞬く水晶体へ豊かな色彩を添
えた。

「戦いを娯楽に見立てて、貴方はどれだけの悲しみを生んできたの
？ 自分だけが楽しむ為に、どれだけの人を苦しませてきたの？」

漆黒の邪竜に視線を合わせ、翠の天使は囁き問う。

冷静で、平静で、しかし譲れない熱を秘めた、一語の問い。それ
へ返す竜の眼は、幾多の暗色に塗り込められて不気味に輝く。不敵
に瞬く。

『たああくさんだよ。いつぱいだ、イツパイだ。数え切れないし、
数えられやしない。ふふふふ、ふふふふふふ』

心に渡る道化の言葉。

愉快で不屈、惨めで不当、無温で不意な、闇の囁きささやく。後悔も、懺
悔も、微塵とてない。ある筈のない不浄の心根。常人には理解し得
ぬ、暗鬼の愉悦が横たわる。跨ぐ事はなかれ。伸び出る絶舌せつしに、舐
め喰われるがな。

「此の世には、救いの届かぬ真実の闇が在るのですね」

天使は真つ直ぐに竜を見詰め、右手を前方へ翳す。

開いた掌を下向け、幾分と目を細めた。

「どうあっても癒せぬのなら、此処で」

突き出された右手から、翠の光が溢れ出す。

それは無数の燐光を伴い、下方目掛けて引き出、太く大きく膨らみ始めた。更に光は幅を取り、長く落ち行く。程無くそれが止まると共に、周囲漂う光の粒が、野太い翠へ結集する。一筋の明光を地へ進らせ、これを破り現れたのは巨大な剣。

全長は天使の身の丈を上回り、翠に輝く長刃は分厚く硬い。両刃の直身、無骨だが洗練された豪打の作りを見せ、天使の姿を反射し映す。物々しく、されども美しい麗剣。夜闇の中にあり仄かに光る刃が、清浄な天明で天使の御姿を浮き立たせた。

翼を模した棒状鍔、手甲へ被さるようなナツクルガード、女性の細指にも馴染む形容のグリップ、これらで構成されたその柄を、天使は五指閉口にて握り掴む。

「私が断ちます！」

堅固な意志と覚悟を乗せて、彼女ははっきりと言い切った。

言葉と共に右手を振るい、巨剣を片手で一閃さす。翠の淡光が軌跡に散り、局所的にも闇を裂く。

直後、天使の両手に肘まで覆う籠手が生まれ、両脚には膝までの具足が付いた。騎士が戦に臨む際、我が身へ纏う装具と同じ。幾許かの豪奢さと、翠の輝きに照らされた軽やかにして強固な守り。

『イイ、イイよ。ふふふふフ、とつてもイ〜！ おいで、おいで、掛かっておいで。愛しき怨敵、天使ちゃああアン。僕に見せておくれ、刹那の夢を。感じさせておくれ、滅びの悦楽を。戦闘の果てに満たしておくれ、僕の渴きを、退屈をおおオオツ！』

竜の口から興奮の嘶いなききが上がる。

多量の唾液を下顎から垂れ流し、数多の眼球を滅茶苦茶に動かし、背翼を激しく羽ばたかせ、強靱な四肢を踏み鳴らす。左右へ忙しなく揺れる尾が壁を打ち、砕き、壊し、全身の鱗が漆黒をより強める。

「安心なさい。貴方には永遠に醒めぬ眠りを与えます。飽く事の無い、悠久の夢を」

天使が応え、表情へ決意を刷いて、右手を振って竜へと向けた。翠の巨剣が切っ先を、魔性の悪竜、その鼻先へ突き付ける。

それと同時に、天使の額へ光の環が回り出す。繋がる光は内側から実体を現し、碧緑のサークレットを構成させた。額の中央へ嵌め込まれた輝石が、彼女の瞳と同様に澄んだ翠光を放つ。

「これが最後の大業です。せめて悔いの無い様に、可能な限り楽しみなさい」

『ふふふふフ、はーはっはっはっはっハ！ もっちろんサアアアアッ！』

翠の天使の宣言と、竜の咆哮が被さった。

巨大な暴風が抜けた天蓋より吹き降ろし、天使の髪と竜の鬣たてがみを激しく揺らす。

一瞬の対峙を経て、天使は宙を、竜は地を、同時に踏み駆け接近した。真正面から両勢が、各々の終わり方を求めてぶつかり合う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8033g/>

城と剣に天使様

2010年10月10日03時12分発行